
エフェクト学園恋目録

Billy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エフェクト学園恋目録

【Nコード】

N4147S

【作者名】

Billy

【あらすじ】

2XXX年、科学者、織間奏がエフェクト細胞を発見した。そして、各々の能力^{ちから}を発揮させるために＜AEC＞と言う機関で6年間の修行を積む。主人公、歩上^{あゆみうへ}大空はその機関でもトップクラスの能力者。機関、仲間を守るために、大空^{すかい}は幾度も迫り来る脅威に立ち向かう。

しかし、大空^{すかい}に迫り来るのは敵だけではなく、美少女達までも来てしまう。美少女達は^{すかい}大空に好意を寄せるが、大空^{すかい}はなかなか女の子達の思いに気付かない。一体、大空^{すかい}はどうなってしまうのか？

因みに、主人公は鈍感のようで鈍感ではありません。

No. 1 天空の光騎士

2XXX年、織間奏おりまかなでと言う博士が、今までの人類には無かった細胞を発見した。その細胞には一定条件を満たすとある能力ちからを発揮される事がわかった。織間博士はその細胞に「エフェクト細胞」と命名した。能力は一人一人異なっているのだが、稀まれに同じ能力が見られる事もあるらしい。数年前、能力を持った人達を育成、強化、誤った使い方をさせないための教育機関＜AEC＞が出来た。ここに所属出来るのは年齢で言うと16歳からで、5年間ここで能力の勉強、強化をする。月に1、2回学年別のトーナメントがある。もちろん、参加、不参加は本人の自由。能力を十分にコントロール出来ているかはS、A、B、Cの4段階で評価される。まあ、所謂能力いわゆるを専門とした高等学校みたいなもんだな。分かりやすいように学園と呼ぶが、俺は明後日からその学園の2年生になる。

「課題も全部やったし、今日はもう寝るかな。」現在は4月7日の夜11時39分。この学園は寮生活で本来なら1つの部屋に2人なのだが、何故だか俺は1人。まあいいけど・・・と気付かないうちに俺は寝てしまっていた。

コンコンコンツと部屋のドアをノックする音が聞こえた。誰だよこんな朝早くに・・・

「コラあ、大空すかい。初日早々遅刻するつもりかあ！早く起きろ！」この声は1年の時の担任だった倉原先生くらはらの声だ。それはいいとして、先生何言っただ？学校が始まるのは明日のはず・・・先生ミスってんなあ。

「先生え、学校は明日からですよお。」と俺は先生に親切に教えてあげた。すると、

「何言っただ！もう皆行ってるぞお。」・・・何ッ！！そんなバカな。と思い、学園の1年間の行事表を見てみる。・・・今日だ。ヤバイ！！急いで支度をしなくては！始業式に遅刻なんかしたらカ

ツコがつかない。

「じゃあ先生行くけど遅れるなよお。それと、始業式は2時限目からだそうだよ。」おっと、これはラッキー。少なくともこれで始業式に遅れる事はなくなった。

「はあい。・・・よし、準備オッケー。それでは行くかな。」俺は自分の部屋を出た。まず、自分が何組かを知る必要がある。たしか、2年のクラス発表してある表は職員室の前だったかな？とりあえず行ってみるか。案の定、職員室の前で正解だった。

「俺は・・・えっと・・・4組か！」それが分かれば！走れ！走れ俺！そして、やっとの思いで教室の前まで来たと思ったら、

「よし、自己紹介も終わったので配布物を配ります。」と聞こえてきた。・・・ま、マズいな・・・いや、しかしこれ以上入りにくい雰囲気になるのはもっとマズい。入るしかないか・・・

「ち、遅刻してすいません！」次にくる言葉は大体分かる。大凡、

「コラあ、歩上^{あゆみうえ}！初日早々遅刻してんじゃねえ！」くらいだろうな。

「コラあ、歩上！初日早々遅刻してんじゃねえ！」ほらな、ドンピシャだ。

「まあいい、早く席に着け。それと、お前だけ自己紹介してないからしとけ！」

「・・・はい。え〜どうも、歩くに上で歩上、大空と書いてスカイと言います。皆さん、スカイと呼んでください。・・・こんな感じでいいですか？」

「ん？あゝいや、あと自分の能力の種類と能力の名前、とレベルを言ってくれ。」

「はい・・・種類はブレード、名前はライトブレード。レベルはSです。・・・これでOK？」俺の能力の説明が終わると同時に、教室が一気にざわめいた。おそらく、俺のレベルがSな事に驚いているのだろう。俺はレベルSの自分を誇ってはいるが、自慢しているわけではない。しようとも思わない。

「ん、御苦労。では配布物を配ります。」

その後、配布物も配り終わり、次は始業式。まあ、俺の予想だと半分以上は能力の解放中に注意する事、能力解放中での禁止事項などについて話すんだろうなあ。

予想は的中した。注意事項や禁止事項、そこまで詳しく言う必要あるか？と思うほど長く、横目で周りを見てみると少なくとも4組だけでも15人は寝てるなあ。俺も寝よっかなあ、と考えているうちに既に寝ていた。気が付いた時はちょうど＜AEC＞代表が話終わって、起立して皆が礼をしているところだった。すかさず俺も立って礼をした。その後の話はやけに短く感じた。そして、そんな感じで始業式も終わり、今日はこれで一応授業は終わり。HRも終わって、さあ寮に戻ろうとした時、一人の女子が話しかけてきた。

「あ、あのう私、かなであき金出秋あきって言います。これから一年間よろしくね。」

「え？ああ、うん。よろしく頼む。俺は・・・」

「あ、知ってますよ。この機関であなたの名前を知らない人なんてきつといませんよ♪」

「そ、そうか？」

「えっとたしか＜天空の光騎士＞・・・でしたっけ？」

「あ、ああ。一部では勝手にそう言ってるらしいね。」

「あれ？自称ではなかったんですね。」

「ち、違う！」

「へへ、じゃあそう言う事で。さようなら。」

「おう、じゃあな。」金出・・・あ！俺の隣の席の子だな。と思っていると、また声をかけられた。今度は男子だ。

「さっきの、この機関のマドンナだぜ。」

「どおりで可愛いワケだ。・・・で、君は？」

「うん、俺は糸宗秀和。いとむねひでかずよろしく、光騎士君！」

「ははあ、勘弁してくれよ、スカイって呼んでくれ。」

「スカイねえ、わかった。じゃあ俺の事もヒデって呼んでくれよな！」

「オッケイ！」こいつ、ヒデとは上手くやっていけそうだ。

それを見ていた一人の男がいた。

「・・・あいつが噂の＜天空の光騎士＞。あんな奴がレベルSなんて、俺は認めねえ！4人しかないレベルS。俺が思うに、あいつは俺を含むレベルSの中で一番弱い。レベルで言えば、良くてAギリギリ。下手をすればレベルBでも勝てるかもしてない。しかもこいつ、情報によると生活態度も悪くて何事にもだらしないらしい。こんな奴がレベルSなんて俺は認めねえ！俺が削除する。次回の学年別トーナメント、上層部に頼んでレベルSだけのトーナメントを開催してもらおう。そして、事故に見せかけて奴を＜削除＞するっ！！待っている、天空の光騎士！」

そんな事は知らず、スカイは寮の自分の部屋でゴロゴロしていた。

「あゝ、暇だなあ。久しぶりにいろんな部活でも見に行くかな！」そう、この機関には部活の制度があるのだ。公式の大会にも出る事もある。もちろん、能力の解放は固く禁じられている。もはや能力専門機関ではなく、能力専門学園である。まずは、ソフトテニス部に行ってみる事にした。

「お、やってるやってる！」とコートを囲っている柵の外から見ていると、テニス部の女の子達が、

「あの人が＜天空の光騎士＞様よ！」「えゝ！？どこどこ？」「あそこよ、ホラ！」と一人の女の子が指をこっちに示す。

「ああ！ほんとだあ！」とテニス部の殆どの女の子がこっちに迫ってくる。そんなにレベルSって珍しいものなのかな？と苦笑いしそうになる。この機か・・・いや学園には、4人もレベルSが居るのに俺ばかり騒がれる気がする。

「どうして、ここに来たの？」「もしかして、狙ってる娘むすめが居るか!？」「あとで一緒に写真撮らない？」「えゝ、ズルいよお。私も私も！」

もう苦笑いをするしかない。

「はは、ははは、はあ・・・じ、じゃあ、さいならあ。」逃げるし

かない。

「えー、写真く・・・」逃げた先にはソフトボール部の練習風景が広がっていた。でも、さっきみたいにかっちに来られると困るので100メートルほど離れて見る事にした。

「うんうん、皆頑張ってるなあ。」バッターがボールを打つ、大きな弧を描いて球が飛んでいく。飛んできた球をワンバウンドでセクターがキャッチ。それを内野手に投げる。いかにもソフトボール、野球の練習風景。

「じゃあ、次に行くかな！次は何を見ようかなあ。」と、他のクラブ行こうとした時！

「スカイ様あー！！」ゲっっ！！ば、バレた！とりあえず逃げる。追い抜かれないように後ろを見ながら走っていたら、前に壁があることに気付かなかった。

「し、しまった！」

「スカイ君、一緒に写真撮ってくれない？」「えー、ズルいい。私も一緒に撮ろうよお？」

言う事は皆一緒なんだなあ。今回も苦笑いするしかない。

「て言うか、近い近い！！」距離にして、約30センチちょっと。四方八方から囲まれている。でも、後ろが壁だから二方四方が正しい・・・のか？そんな事はどうでもいい。このピンチをどう抜け出すか・・・ダメだ！冷静に考えられない。こうなったらあの手を使うしかないのか・・・

「あ、後ろ後ろ！先生来たよ？」

「えー！？嘘！ってどこにも居ないじゃ・・・アレ？スカイ君？」

俺は能力を使い、瞬時に寮の自分の部屋に戻った。

「ふー、こういう時は能力が役に立つよなあ。」俺の能力、ライトブレードは力の解放をする事によって持ち主のスピードを光の速さにする事も出来る。もちろん、他の能力もあるが・・・そもそも、ブレード系の能力で、持ち主にまで影響するなんてことは本来なら有り得ない。ライトブレードは少し特別な面があるらしい。

「今日はもう眠い。そろそろ寝るか。」そう思ってベッドに向かおうとした時、誰かが俺の部屋のドアをノックした。

No. 1 天空の光騎士（後書き）

次回作は新キャラの美少女達が続出！戦闘も交えて行きたいと思います。また、大空は鈍感です。ですが、徐々に女の子の感情も理解できるようになっていきます。そして、大空の部屋について二人目の住居人が！？

No. 2 再会? (前書き)

更新遅れてすいません!

もう1つの作品に熱を入れていてこっちの更新の事すっかり忘れて
ました。

本当に申し訳ない限りです。

久しぶりと言う事だけあって駄文かもしれませんが――――

いや、駄文ですが温かい目で見えて頂けると幸いです
では!!

No. 2 再会？

「誰だよ、こんな時間に…」

ってまだそんなに遅い時間じゃないんだが、まあ取り敢えずドアを開けよう。

「はーい、どちら様…ってヒデ！どした？」

訪問者は今日出会ったばかりの糸宗秀和だった。一体何の用だ？

「別に用ってわけじゃない、暇だから来たんだ。邪魔だったなら帰るが」

んー、邪魔か邪魔じゃないかで言うところだな…まあここは新しく出来た友達を相手にする訳だから悪い印象を付けない為に邪魔じゃない事にしよう。嘘じゃないんだし。

「俺も暇だったんだ、丁度いい。上がっててくれ」

「あれ？相部屋の人いないのか？」

…あ、そうか。俺以外は大体、部屋にもう1人いるのか。

スカイは横に振っていないと言う事をヒデに示した。

「俺は1人部屋だ、気軽に使ってくれ」

「いいな、1人部屋。俺も1人部屋が良かったな…ところで――――」

「ん？なんだ？」

ヒデがこの部屋の至る部分を探り始めた。

おい！エロ本なんて持ってねえぞ！

ヒデは詮索し終わるを俺の目の前に座った。

おい！BLとかマジ勘弁だぞ！

しかし、ヒデから告げられた言葉はスカイを驚愕させた。

「俺が聞いた噂によると3年のレベルS、針城はりじょう 久我くがが次のトーナメントでお前を潰しに掛るらしいぞ…」

針城久我？　そういやどっかで聞いた覚えがあるような…ないな。しかしその情報、おかしいな。何せトーナメントは————

「おいおい、悪い冗談はよしてくれ。そいつと俺じゃレベルは一緒でも学年が違うから、トーナメントで戦う事はないだろ？」

そう、トーナメントは学年別で行われるもの。そいつは3年で俺は2年。戦うってのは無理な話だ。

「そんなぐらいい俺も分かってる」

「じゃあ何でそんな情報を俺に教えてくれたんだ？」

「その針城って奴、レベルSの特権とか言って上層部に頼むらしいぞ」

「何を？」

すると再び辺りを見回すヒデ。そして俺の耳元でこう囁いた。

「レベルSだけの大会を開催するようにだ！」

「レベルSだけ！？」

俺が驚愕の表情を見せるとヒデは外を見た。俺も釣られて外を見ると結構暗くなっていた。そんなに長い時間話していたつもりは無いんだがな…

「まあそれに関する情報を手に入れたらまた教える。今日はもう帰るわ」

「おう、ありがとな」

「ああ、じゃあな」

そう言ってヒデは出ていった。

グウウウウ…

あ、腹が鳴った。そういや今日は朝も昼も何も食べていないな…晩ぐらい何か食べようかな…

スカイは部屋を出て食堂に向かった。

「流石にこの時間食堂に来る奴は少ないな」

部屋から食堂まで5分と掛らない。その5分の道ですれ違った人は10人もいないだろう。

食堂を見渡しても10人もいない。

まあ、この方が静かでもいいか。

「すいません、この唐揚げ定食を2つと牛丼の特盛りサイズを3つ、あと味噌ラーメン1つで」

「え!?! あ、はい」

この人、新人さんだな。いつものおばちゃんなら言わなくてもラーメン以外は雰囲気だけで当ててくれるのに…まあ気にしないけど。

そしてスカイは適当な席に座り、周りを見渡す。勉強するやつ、話しているやつ、俺同様晩飯を食いに来たやつ、さまざまなやつがいる。

そんな中、1人だけ異様な雰囲気を出す奴がいた。

「あいつは…確か…大う—————」

その時、俺の持っている番号札と同じ番号が呼ばれた。

早いな！まあおぼちゃんの事だから俺の来る時間帯を把握していて、ある程度先に仕込んでいたんだな。

スカイは晩飯の乗ったトレーを3分割にして机に運んだ。
その半分を5分くらいで平らげた。

スカイが2つ目の唐揚げ定食を頬張っていた時、スカイの横をある人物が通り過ぎた。

スカイはその人物と目があった。

「天空の光騎士か…」

「ん？…そう言うあんたは…？」

ちよっと口を物を入れ過ぎたか。返事するのが遅れてしまった。が、一体誰だったかな…思いだせん…

「まさか、機関に4人しかいないレベルSの名前も覚えていないとはな…こんな奴とは一緒にしてほしくないものだな」

その言葉はスカイに青筋を立てさせた。

「おい、喧嘩売ってのか。売ってんなら買ってもいいんだぜ？」

「…これだから短気者は…それに今の話し方だとまるで自分の方が強いと言っているようだが？」

「お前がどんな力を持ってるか知らねえが、断言してやるよ。俺はお前より強いッ！」

2人の間に火花が散る。

「じゃあ今ここで試してみるか…ッ！」

スカイは立ち上がりライトブレードを取りだした。

「……いや、取り出そうとした。」

「ッけ！、止めとくよ」

「逃げるか？」

「そう受け取ってもいいぞ、そんな事に拘らねえからな。今俺は食事中なんだ。どうしてもやるってんなら俺が食い終わるまで待ってもらう」

「・・・まあいい。光騎士よ、その天空から落ちないように精々気を付ける事だな」

「待て！」

「・・・」

「学年と名前を聞かせろ」

「・・・6年、名前は大海^{おおうみるーと}流人。この機関で最初のレベルSになった者だ」

大海はスカイにそう告げると食堂を後にした。

スカイは残りの晩飯を僅か3分で平らげると、自室に戻った。

いつの間にかスカイは眠りについていたらしく、目を覚ましたのは朝の5時。

「・・・ふああゝ・・・シャワーでも浴びるか・・・」

シャワーを浴び終え、脱衣所から出て来たスカイ。時計を見ると短針は丁度7と8の間を指していた。

^{ホームルーム}
HRが始まるのは8時15分。ぼちぼち行くとするかな。

スカイは白を基調とした制服に着替え、部屋を後にした。
そして廊下に出て少しした所でこの機関のマドンナと謳われている

らしい金出秋とぼったり遭遇した。

「よう金出！」

「あ、歩上くん！」

「いや、スカイでいいよ」

「そう？じゃあ私の事もアキでいいよ」

「わかった、じゃあ一緒に行くか」

2人は2年4組へと向かった。

教室に着くと、スカイはヒデにアキの事を訊かれ、ただただ普通に登校の時の事を話した。

そしてHR。

「はい、いいか。まだ2年生始まって2日目だが転校生が来ている」

はい来たよ良くあるパターン。

「では、入ってくれ」

教室に入って来たのはこれまた美少女。しかしスカイはその少女に見覚えがあった。

「じゃあ自己紹介、名前と力の種類と名前。ではどうぞ！」

「…星之江 留奈です、力の種類はサポートで名前はエンジェルマスターです」

「と言うわけで、星之江だ！仲良くしてやってくれ。それとスカイ、この娘と知り合い何だろ？今日から星之江と相部屋な！」

「…ええええええッ！？」

No. 2 再会? (後書き)

久しぶりの更新、どうでしたか？

きつと上手く纏まっていなと思います——

——いや、纏まっています。断言します (マジッ！

まあ一応こんな感じで：

次の更新が何時になるかは分かりませんが更新された際には温かい目で見えて頂けると幸いです：

ではそう言う事でさよならノシ

N o. 3 過去と未来は繋がらない（前書き）

お久の更新です（汗

ストックはあるんですが、下書きで、実際に描くのが面倒で更新がこんな感じになっている模様です。

まあこんな駄文でも読んで下さる皆様に感謝しています。

ではどうぞ！！

No. 3 過去と未来は繋がらない

「…えええええええッ!？」

いきなり? しかも女子と相部屋? 嘘だろ!?

嘘だと言ってくれ先生ええッ!!

まあ星之江、いや留奈と知り合いだけだよ、知ってる程度だぜ?

幼馴染でもなければ、話したことなんて数回、数えられる程度しかないのに…

「それじゃあ星之江、お前の席は窓側の一番後ろの席だ」

「はい」

窓側のってことは俺の列の一番後ろってわけか。

留奈は俺の横を通して自分の席に向かった。

それにしても『エンジェルマスター』とは、これまた珍しい能力持ちからってんだな。

…そりゃそうか。

「それじゃあ早速授業をするぞお、ノートと教科書の準備しろよお
——」

時は過ぎ、時刻は12時50分

「はあ、疲れた。やっと午前授業が終わった…」

「そうだな、そんでもって午後からは実技授業って言ったな。面倒臭えな…」

実技授業かあ、能力を使っの授業。能力ごとに別れるから、おそ

らくヒデとは離れる、暇になるなあ。

それに、俺はもう先生から学ぶことなんて無い、とか言われて代表例にされてみんなの前に立たされて…

「…はあ、面倒臭えよ。本当で^{マジ}」

「まあいい、食堂行こうぜ」

「あ、ああ」

俺とヒデは教室を出て食堂に向かった。



「そう言えはスカイ、お前よお」

「ん？何だ？」

「お前、今日転校して来た星之江って子と知りあいなんだろ？どんな子なんだ？」

何コイツ、狙ってんの？まあどうでもいいけどよ…

何も話してねえのに鼻の下伸ばすのやめろッ！！正直、いや普通にキモいわッ！！

口から食べたもんが出てっから！！

「んー、どんなって言われると…おとなしー」

「大人しい子かあ、まあここは当然クリアだな。うんうん」

意味分かんねえよ、なんだよ当然って。なんだよクリアって。

「人の話は最後まで聞け、『大人しい』じゃなくて『大人しくなくて』だ」

「なんだよそれ！！ちょっと無理あるぞ」

「悪い悪い」

「で、他には？」

「んー、俺はあんまり話したことねえから見た限りのことしか言えないけど」

天真爛漫というか、元気？そう元気だな」

「よし入ったあ」

えっとお、何が？

「あ、そう言えば」

「ん？何だ？有力な情報でも思い出したか！？」

何に有力なんだよ…

「いや違う、昨日の晩、ここで6年の大海…ん？大海い…大うm——」

「大海流人のことか？大海先輩でいいんだよ、で先輩がなんだ？」

「おおそれだ、その人に宣戦布告？されたん——」

「マジか！？お前それはマジでやばいぞ！」

焦り様ハンパないな。なんでお前そんなに汗だくなんだよ。

「何？そんなにやばいの？何が？何がやばいの？」

「あの人は…この学園で…一番強い…」

「フーン、ソウナノカ（棒読み）」

「真面目に聞け！！トーナメントとかで先輩と闘って怪我をしてないやつはいないんだ！！」

「…お前の情報網って一体…」

「それどころか、”身”に触れたやつすらいらないんだ」

「そうか、それはすごいな」

っていうか飯全然食ってなかった。
まあ、レベルSなんだ。そんなくらいのことはしていてももらわないとこっちが困る。

「しかもお前、もしかしたらレベルSだけのトーナメントがあるかも知れねえんだぞ！」

もし、しょっぱなの相手が大海先輩だったら――」

「騒ぐなよ、仮にも俺もレベルSだ。それに――」

「――俺だってノーダメージで勝ったことなんざ余裕であるっつうの！」

なんせ、光の速さで動けるんだからな、俺は」
「……」

ヒデが騒ぎすぎたせいとか？周りの人たちみんな俺たちの方見てる。つーかなんでヒデは何も気にしてないんだよ。

「さあ、そろそろ教室に戻ろおぜ」

「あ、ああ」

俺とヒデは食堂を出て、教室に向かった。



しけてんなあ、と思わず口にしてしまいそうになるくらいしらけている教室だ。

教室にいるのは5〜10人くらいか。

その中に今日転校してきた留奈もいた。

柄に似合わず？自分の席に座って窓の外を眺めている。

…よく見ると結構可愛いな。ヒデが狙うのも分かる気がする。

きつと今頃俺の横にいるヒデは留奈を見ながら鼻の下を限界まで伸ばしているに違いない。

ちよっと顔を覗いてみ…あれヒデは？

「よ、よう、俺は糸宗秀和。ヒデって呼んでくれ」

「…」

あいつ、どんだけだよ。

アタックし過ぎだろ。

…でもまあ恋なんてそんなもんか。

困ってるみたいだから助けに行くか。

「よう留奈、久しぶりだな」

「スカイ！久しぶり。転校して来たとき、スカイがいてビックリしたわよ。」

まあ、スカイの方がビックリしてたみたいだったけどね」

初めてのヒデside

（あ、あつれえ！？おかしいな。スカイの話だと話したことあるのは数回だけって行ってた気が…）

「ん？ヒデ、何固まってんだよ」

「あ、いや。妙に仲いいなと思って」

「？」

「話したことは数回しかないって…」

「ああ、数回だけだ。でも俺と留奈はちいと特別な関係があつてな」

（と、ととと、特別ッ！？”特”な”別”で特別！？
な、何なんだ！？一体何なんだああ！！！）

プシュウウウウウ：

side out 否 理性 out

な、なんかヒデの頭から白い煙が出てきた：：
一体ヒデに何が。

：まあ何でもいいけどな。

「スカイ」

「おう、何だ？」

「レベル：Sになったんだってね」

「：ああ」

「私はスカイのこと詳しくは知らないけど、狙いはやっぱり」

「ああ、思ってるので間違ってると思う」

「：フフ」

「な、何だよ」

「いや、今はこんなに強いスカイでも、私と出会ったときはレベル
”C”にも満たないレベル”D”だったのにな
それを思い出したらちよつとね」

そうだよな、俺と留奈は6～7年前。珍しい能力を持っている者が
一部の地域から集められた。
そこで俺と留奈は出会った。

集められたのは全体で10～20人。

その中で留奈は優秀生徒だった。そんでもって俺はその20人くら
いの中でビリか良くてブービー賞だ。

ブービー賞、つまりビリから2番目ってこと。

そんな俺が今ではレベルSだ。笑うのも無理はないってこった。

「留奈は今レベル何だ？」

「Aよ、スカイがぐんぐん成長してる間、私の成長は止まってたってわけよ」

なんか俺が悪いみたいに言ってる？

言ってるよ？お願い、言わないで！！

「あ、スカイが悪いみたいに言ってるように聞こえる？」

「…（コクン）」

「ごめんごめん、そんなつもりはなかったのよ」

よ、よかった…

「ははは、良かった…」

「何か言った？」

「いや、何も」

口に出ちゃった！？あぶねえ。

「ふうん、ま、これからもよろしくね」

「ああ、よろしくな！」

俺と留奈は拍手を交わした。

N o. 3 過去と未来は繋がらない（後書き）

書き方を少し変えてみました。

どうですか？

駄文が更に駄文になってますよね！

分かってます。本当にすいません！

文書作成が上達するよう頑張りますので

最後まで付き合って下さると嬉しいです。では、

感想待ってます

No. 4 〈登場人物紹介〉

■ あゆみうえ 歩上 すかい 大空

・身長 172?

・武器種 ブレード

・武器名 ライトブレード 光騎剣

・容姿 髪の色は黒

・紹介文

AECに4人しかいなレベルSの一人。ちなみにAECは各地にあり日本だけで13つある。

スカイ達がいるのは…島という情報があるがこれ以上は機密らしい。
(機密って使い方と意味的にあってる?)

その島に建設されているAECの中ではレベルSは4人。

過去にすでに留奈と出会っていて、その時のスカイのレベルは”D”。

レベル”D”とは…ようは価値なし、ってレベルだ。

2年生でレベルS。このAECでは最も若いレベルSだ。

ちなみに言うておくが軽く鈍感が入っている。

■ いとむね 糸宗 ひでかず 秀和

・身長 169?

・武器種 現在不明

・武器名 現在不明

・容姿 髪の色は茶

・紹介文

スカイと同じクラスの生徒。情報網の広さがすごく、あらゆる情報を知っている。

決して変態というわけではないが星之江 留奈のことになるととにかく鼻の下が伸びる。(例えシモ的な話題でなくとも)

まだ謎の多い人物だ。

■星之江 留奈 ほしのえ るな

- ・身長 155?
- ・武器種 サポート
- ・武器名 エンジェルマスター
- ・容姿 ご想像にお任せします。
- ・紹介文

学園が始まって2日目で転校してきた美少女。その可愛さは学園のマドンナと謳われている金出 秋にも引けを取らないほど

。過去にスカイと会ったことがあるだけ、スカイとはすぐに意気投合した。

留奈がスカイと初めて出会ったときはレベルBで現在はレベルA。落ち着きのない性格で、テンパると思考が停止してしまう。

以前は北部の方にあるAECにいた。

「容姿」で、「ご想像にお任せします」と言ったが、髪型はツインテール。色は黄色ってことで。

■金出 秋 かなで あき

- ・身長 153?
- ・武器種 現在不明
- ・武器名 現在不明
- ・容姿 留奈に同じくご想像で。
- ・紹介文

AECの中でマドンナ的存在、と言っていたがアイドル的存在に撤回。

髪の色はオレンジ。大人しく明るい性格。その性格のおかげで(?)周りはいつも賑やかでいる。

得意なものは料理、苦手なものは昆虫とチャライ性格の人らしい。
今はまだスカイに好意を持っていないが、好意の矢印はいつスカイ
に向くのか。そもそも向くのか？

■ おおしみ 大海 りゅうと 流人

・身長 179？

・武器種 現在不明

・武器名 現在不明

・容姿 瞳は赤 髪の色は紺

・紹介文

AECの6年生。自分をこのAECの中で初めてレベルSになっ
た者と言うが、ヒデの情報によると嘘ではないらしい。

N o. 4 〈登場人物紹介〉（後書き）

今のところはこんな感じです。

進むにつれて更新していこうと思います。

N o. 5 〽実技授業にて〽 (前書き)

はい、今回もイイ感じに駄文になってます！
オリジナル小説って設定が面倒臭いんですよ（汗
まあ今回もいつもと同じくグダグダですが、
温かい目で見えて頂けると嬉しいです。
ではどうぞ！

No. 5 実技授業にて

5時限目の予鈴のチャイムが鳴り、スカイやヒデは男子更衣室で体操着に着替える。

5、6時限目は実技授業だ。教室から見たグラウンドは太陽の日が燦さんと照りつけていて、外の暑さを物語っていた。

実技授業、実際に能力ちからを使って能力の使い方やテクニックを高める授業。

実技授業にて

「あゝ、面倒臭えな」

「まあ仕方ねえだろ、暑いのは勘弁だけだな…さあ、行こうぜ」
「ああ」

しかしこの実技授業は、何時間やっても好きになれんな。

正直なところ、俺はもう教師たちに学ぶことなんてちっともねえからなあ。

…ハア。本当に面倒臭えな。

5時限目開始のチャイムが鳴った。

先生が4組生徒全員居るか確認するための出席を取り始めた。

「――歩上」

「はい…」

「何だその声は！もう一回！」

なんだよこの熱血教師は。

ただでさえ日が暑いつてのに、さらに暑苦しくなるじゃねえか。

「歩上え」

「はい」

「んゝ…まあ良しとしよう。次はもっと大きい声でな」

「…はい」

「大きい声でなッ!!」

「はい」

授業も面倒臭えけど、2年生になって実技の教師も面倒臭くなったな…オイ。

出席確認が済むと、先生からこれからの授業の注意点等を話し始めた。

「はい、まず、武器系統の能力の持ち主は、武器を人に向けないこと。次に――」

子供に教えるわけじゃねえんだから、そんなくらいわかるつつうの。

「――では、これから実技授業に入る。能力別に分かれろ」

「ヒデ、お前の能力って種類何だ？」

「俺か？俺は”眼”、つまりボディーだ」

「はあ、やっぱりか。わかった。じゃあな」

「おう、頑張れよ」

（それ、俺に言うセリフか？）

と、心の中でツッコんでおこう。

あゝ、これから2時間暇になるなあ。話す相手もいな――ん？
そいえば、あいつも俺と同じ4くm――

「やあ、スカイ君。2年になって話すのは初めてだね」

「?…ああ、やっぱりお前も4組だったか」

俺に話してきたのは1年の時も同じクラスだったブレード使い、霧^{きり}藤^{どう} 霊音^{れおん}だった。

相変わらず優等生みたいな喋り方だな。…まあ実際に優等生なんだけどな。

そんなことより、話せるやつがいてよかった。これで暇になることはないな。

「僕は最初から、君が4組って知ってたけどね」

「……そりゃそうだ、初日遅刻でクラス全員の視線を受けたんだからな」

「へへ、わかってたか」

という、たわいもない話を終え、『ブレード』専門授業は始まった。

「はい、皆さん初めましてー、私が2年生の実技授業『ブレード』の担任のお、潤^{うるおい} 加那銘^{かなめ}でーす。よろしくお願いしまーす（棒読み）」

…なんだこの緩いと言うか、やる気がないと言うか…って感じの教師は。

全てに関して感情がこもってない…だと?

こんなでよく教師が務まるもんだな。…大丈夫なのか?

「まあ早速なんですけどー、君たちが1年生の時は能力の発動の仕方とかをこの実技授業でやったと思うんですがー、

この授業はブレード使いとしての最低限のテクニクを学んでいこ

うと思います（棒読み）

棒読み：聞いててこっちはスゲー疲れる…

これが1年間続くのか、キツイな。

「では今から実際に私と…歩上君で闘ってみたいと思うのでー、まずはその闘いを見ていてくださーい（棒読み）」

「えッ！？俺ですか!？」

「この機関に『歩上』という名字の人はあなたしかいません（棒読み）」

「う…何という正論…」

この先生、思ったことを何の躊躇いもなく言うタイプだな。絡みづらい教師だな。絡む気もないけど。

「では準備してくださいーい（棒読み）」

「…はい」

俺は並んでいる列から出て皆の前に立った。

闘うのは構わないが、こう言うのが嫌なんだよな…

まあしゃーない。ちゃっちゃと終わらせるか。

「…このくらい離ればいいですかねー（棒読み）」

「そうですね、まあそんなに激しくないようにしますよね」

「…出来れば皆さんのお手本になるような動きをしてくださいね（棒読み）」

うう、つまり俺に能力を使うって言うてるもんだな。

お手本ってことは俺の技の一つの光速移動が出来ねえじゃねえか。困ったな…ま、どおでもいいけど。

さ、発動するのでしょうか。

俺の周囲が光で包まれる。

これは俺だけじゃない、能力を発動すると全員こんな感じになる。そして、能力を発動した俺の姿は――

「あれが歩上君の能力発動変化かあ」
エフエクテイトド

「歩上君の袴姿…」

「カッコいいッ!!」

「歩上君!こっち見てえッ!!」

そう、俺は能力を発動した後の姿は袴はかまの上に袴かみしもを羽織っている姿なんだ。

最初は動きずらかったが、さすがにもう慣れたな。

ちなみに能力を発動した後の姿のことを能力発動変化エフエクテイトドという。

この能力発動変化によって能力による攻撃から身体を護っている。

まあ簡単に言うとな俺で言うこの袴と袴はバリア見たいなものだ。

剣でも身体は斬ることはできない。衝撃は通るけどな。

ってか、見るなら静かに見てくれッ!!

「ライトブレード:でいいんですか? (棒読み)」

「…知ってましたか、ええ、これでOKです」

俺の手に握られているのは一見普通の日本刀。

黄色い柄に黒い柄巻、金色の鐔、黒い鞘には赤い下緒さげお。

下緒は袴の帯に結び付けて鞘が帯から抜け落ちないようにするものこと。

今も帯に結び付けている。

「俺はいつでもOKですけど?」

「じゃあ私も能力発動変化するのでしょうかー (棒読み)」
エフエクテイトド

潤の身体から光が放たれ始めた。

やつのブレードは一体…

っと準備完了か。

やつの姿が露わになった。

「これが私の”大鎌”の『ウォンティブアーロン』です（棒読み）

見た目は死神みたいだな。死神を見たことないけど…

黒を基調としたボロボロのローブを見に纏ってフードを深く被ってりゃ、死神にしか見えんわ！

おまけに手には大鎌…か。

柄は真っ黒、大きい刀身も黒く刃は血で染まったかのように赤い。異様な武器だな。

「じゃー、行きますよー（棒読み）

「ッ！！」

潤は一瞬で俺との間合いを詰めてきた。

そういや俺は移動系統の技は使えないんだよな…お手本だから。

しかし、相手の次の攻撃は大体分かる。

振り上げている大鎌を振り下ろしてくる。まあこれを読むのは簡単だ。

そして避けるのも簡単、俺の攻撃を叩きこむのも簡単だ。

「鎌は懐に入れば大丈夫なんだなあ、これが」

「それでも先生ですよー、そんなに甘くは——」

振り上げられている鎌を持っているのは右手だけ！？あんなにデカイ鎌を！？

てか、今の攻撃は見本にならないだろ！
しまっ——

「あがッ」

俺は潤のエルボーを額にもらい、後退する。

ここで顔面にしないのはさすが先生だと思ったね。

しかし、攻撃をくらってしまったせいで一瞬の隙が出来てしまった。

光速移動が出来ないので、結構きついな…

「もう、終わりですかー？（棒読み）」

片手で持っていた大鎌を振り下ろしてきた。

「んなわけあるかぁッ！！」

俺はバク転で攻撃を回避、そこから一気に距離を詰める。

しかし、そんな簡単に詰めさせてくれるわけねえよな。

横からまず一撃、これは跳んで回避したら…つむ。

しゃがんで回避の後は懐に入りたいが、左手が邪魔をしてくる、だ
ったらこれしかないよな。

「よっと！」

「あー、読まれてましたかー（棒読み）」

俺は刀を抜き、潤の左手を金色の刃で斬りつけた。

「読まれてた」と言うが、潤は俺が左手を攻撃してくることを知っ
ててわざと受けたな。

何度も言うが見本だから、当然と言うべきか。

「ついでだ!」

「おごー(棒読み)」

俺は空いていた左手で潤の腹に殴りを一発叩きこんだ。

さらにもう一発――

「はー、今の避けますかー(棒読み)」

「いやいや、今のは案外楽でしたよ」

「そうでしたかー? まあ勝負はこの辺にしとしましゅうー(棒読み)」

「あれ、短くないですか?」

「いえー、今の勝負の中で十分、基本テクニックは詰まっていたのでー(棒読み)」

「: : : そうですか」

俺は鞘に刀を納めた。

そして能力を解除した。ふう、何というか、疲れたな。

それにしても、潤、見本とは言え、本気の1割程度しか出してなかったな。

さすがブレード実技担任なだけはあるな。

「はい、今の勝負、どうでしたかー(棒読み)」

あれ? みんなどうしちゃったの?

黙り込んで……

「あのお、今の動きが最低限のテクニックなんですか?」

「正直ついて行けませんでした」

「私もお」

「それに結構短かった」

ま、マジか。結構頑張ったぞ？見本になるように：

「いやー、彼はとても頑張ってくれましたよー、見本になるように（棒読み）」

棒読みで言われてもまったく嬉しくねえ：

てか、基本とは言え、見ただけで教えるのはどうかと思うぞ？

「そうですねー、じゃあ、この中でレベルAの人は挙手してくださいーい」

『ブレード』は全員で13人。レベルAは、いて1〜2だろうな。

「：1人ですかー、歩上君を含めて2人。じゃあ残りの人は2組に分かれて、

歩上君、霧藤君に教えてもらってくださいーい（棒読み）」

：あんた本当に教師なのか？

何で自分を教える側に含めねえんだよ！

まったく、何を考えてんのかわかんない人だな。

「私、歩上君がいい！」

「私もお！」

「私は霧藤君がいいなあ」

「だよねえ！」

「——レオン、これから大変になるな：」

「：そうだね、スカイ君の『これから』って言葉がさらに重くさせたよ」

「：すまねえ」

それから約1時間半、俺とレオンは教える側として全ての力を使って、他の生徒に基本を教えた。

正直、授業が終わった時は立っているのがやっとだった。

何度、反復横跳び、立ちしゃがみ、バク転をさせられたことか。

「次の実技授業はアリーナで行う、いいな？」

「「はい」」

「それじゃあ授業を終わる、しっかり身体を休めるように」



「あゝ、疲れた、いや本当で^{マジ}」

「ご苦労だったな」

「俺、自室に戻ったらシャワー浴びてちよつと寝るから、その間は俺に用があっても俺の部屋に来るなよ」

「へいへい、じゃあまたな」

ヒデは食堂の方に向かった。

俺も早く部屋に戻ろう。早くシャワーを浴びたいし、早く寝たい。これ以上は身体が持たん。

「ふう、やっと戻った。ちゃっちゃとシャワー浴びて寝よ」

俺は脱衣室に入って服、ズボン（その他もろもろ）を脱ぎ、浴室に入ってシャワーを浴びた。

（十数分後）

「あゝ、生き返った、後は寝るだけだ」

さっさと身体を拭いてベッドにインしたい。

あゝ、そう思っただけで睡魔が俺を襲いに來たぞ。
こんちくしょう。

よし髪も乾かしたし：パンツ穿くのわすれてた。

：あれ、パンツ忘れたか？取りに行くか。一般人として、全裸でそこらをホイホイ動いてたらキモいから、
タオルくらい腰に巻いとくか。

ガチャッ

「あ、スカイ。あが――」

「え？何で留奈が――」

「キャアアアアアアッ！！」

ん？何で背中を向けんだ？

：しまった！いくらタオルを巻いてるからって女子はそういうのが無理なんだっけ？

とにかく誤解を解かなくては。：何の誤解？まあそんなのはどうでもいい。

「ち、違う。パンツを忘れてだな」

「じ、じゃあ早く／＼／＼／」

「す、すまない」

俺はパンツを取ってすぐ脱衣室に戻った。

てか何で留奈が？

ああ、今日から同室だっけ？すっかり忘れてた！
留奈には悪いことしちゃったな。

「も、もう大丈夫だ」

脱衣室にジャージがあつてよかった…

なかったら今度はパンツ姿で服取りに行かなくちゃいけなかったぞ。

「…」

「…そのお、何だ、さっきはすまなかった」

「…うん」

よかった、そこまで怒ってないみたいだ。

再会そうそう、悪い印象を与えては元も子もないからな。

「…じゃあ、俺は寝るな」

「…うん」

ベッドに横になった俺はついさっきアクシデントが起こったばかり
というのに、

すぐ眠りにつくことが出来た。

N o. 5 〽実技授業にて〽（後書き）

どうでしたか？

上記の通り駄文だったと思いますが、

皆さんに報告があります。

上記で能力発動変化の設定ですが、

書いて思っただんですが明らかにアイ〇ス（I〇）のパクリでしたよね。

本当に申し訳ありません。

でも設定的にはそんな感じなんですよ、恥ずかしい事に…

…まあそゆ事なんで、本当にすいません。

では、次回に続くと言う事でノシ

No. 6 消えない不安 スカイの過去と悩みの真相

「んゝ…ん？」

携帯はどこだゝ…あれ？

「…結構寝てたなあ」

携帯のディスプレイに表示されている時計の時刻は10時13分。
まあ授業で疲労が溜まってたからな、無理もないってゆうか、なん
つつうか。

「そうね、寝言言うくらいぐっすり寝てたわよ？」

「おお、留奈。起きてたのか」

ベッドに入り、上半身だけ起こして本を読んでいる留奈の姿、結構
合うな。

「ええ」

「もしかして、寝言がうるさくて寝れなかったとか？」

「違うわよ、読んでも小説が気になってずっと読んでたの」

因みに…寝言ってどんなことを…聞くのも恐ろしくなってきた。
ってか、腹減ったな…食堂行くかな。

「ちょっと食堂行ってくるわあ」

「あ、えっと…」

「ん？どした？」

「…いや、何でもないわ」

——キュルルル

ん？今の音、俺の腹じゃないぞ？

…ってことは——

「…晩飯食ってないのか？」

「…う、うん」

「そっか。じゃあ一緒に行こうぜ？」

「え？」

「だって食ってねえんだろ？俺も一人で行くの嫌だしよ、だから一緒に行こうぜ？」

ん？何が留奈のテンションが一瞬下がった気がするが…気のせいかな。

「ええ」



「やっぱりこの時間帯は殆どいねえな」

「そうね、いつもこの時間帯なの？」

「んゝそうだな。あんま人のいる時に食いたくないんだ」

「へゝ、そうなの」

「留奈は何食べる？」

「私は…サバ煮込み定食にするわ」

「そうか、じゃあ俺は————」

「…すごい量ね」

「あん？いつもこれくらい食ってるぞ？」

「す、すごいわね。スカイは昔から大食いで有名だったから何とな

く予想してたけれど、
こんなには思わなかったわ」

昔から？…ああ、俺と留奈が初めて会った頃のことか。
昔からそんなに食ってる気はしなかったんだけどな。
まあいい、それよりさっさと食べよう。腹が減ってたばっちまい
そうだ。



食事を終え、俺と留奈は食堂を後にし、自室に向かった。

「食べてる時は何も喋らないのね」

「食べてる時に話すってマナー悪くね？」

「そうかもしれないけど…こっちとしては何か気まずかったわ」

食事中に話すのって、何か嫌なんだよなあ。

おっと、そんな事を思っているうち自室に着いたつと。

「んじゃ、俺はもう寝るわあ。留奈も早く寝た方がいいかもだぞ？」

「ふふ、ありがとう。私もきりのいいところまで読んだら寝ることにするわ」

「そうか、じゃあお先に失礼」

——どのくらい時間が経っただろうか。

となりの方からランプの照明を切る音がした。

…案外長かったな。だけど、もうちょい時間を置く必要がある。

留奈が完全に眠るまで、もうちょい…

「——…そろそろいいかな」

ランプの照明を切る音がして数十分。
もう完全に寝入っただろう。

よし、もう大丈夫だろう。

俺は、自室から出て、ある場所へと向かった。

——ここは屋上。

この時間帯、もう深夜の1時を回っている今、ここに来るやつなど
いる筈かない。

特に用があるわけじゃない。一度寝て、寝れなくなったらここに来て
夜風に吹かれるのが最近の：1年の3学期頃からの俺の習慣だ。

「：ふうう、どうしたモンかねえ：」

俺は最近、あることについて考えている。

それは前にヒデから聞いた『レベルSのみのトーナメント』のこと
だ。

そしてヒデから聞いた要注意人物：大海^{おおうみ} 流人^{るーと}。

俺を潰そうと企む針城^{はりじょう} 久我^{くが}。

あともう一人のレベルS。どんな奴かはまだ分からないが、
そいつも俺のことを狙っている可能性もある。

一体何故俺を狙うんだ？

周りから見れば、俺の方が大海よりも要注意人物ってことなのか？

「：周りは敵だらけてることか」

「そうとは限らないわよ？」

誰だ！？

俺が振り返るとそこには俺と同室の星之江 留奈がいた。
俺をつけてたのか？いつから？

「うう…この時期、まだ夜は寒いわね」

「いつからつけてたんだ？」

「そうね…ここに来たのはさっきだけど、いつって訊かれれば最初からよ」

「マジかよ!？」

「一つも寝言ってなかったから、寝ていないと疑っていたのよ」

「な、なるほどねえ」

そこまで意識してなかったな。ずっと一人部屋だったからそんなこと気にもしなかった。

「でも安心して、何を言っていたのかは聞いていないから」

「…そうか」

まあ聞かれちゃいけない内容じゃねえから構わねえけど。

「ここで何してたの？」

「考え事…かな」

「ふーん」

…この空気、どうしようッ!!

なんかやけに重い気がするのは気のせいかな？

くっそオ、何か話題を、話題を探せなくては。

「ヘクシュンッ」

「お、おい、大丈夫か？」

「大丈夫、ちょっと冷えたみたい」

鼻声、もしかして風邪ひかせちゃったか？

「えっとだな…そうだ！これ着てろ」

今、留奈にしてやれることはこんくらいしかねえか。

「え？これ、スカイの上着…」

「いいから、留奈はこれ着て部屋に戻ってろ。俺はもう少しここに残るから」

「で、でもこれないとスカイが寒いんじゃない？」

「いいって言ってるだろ？人の親切は素直に受け取るもんだぞ？」

「…うん、ありがとう」

「じゃあな、ちゃんと寝とけよお」

はあ、留奈には悪いことしちゃったな。

またあとでちゃんと謝らねえとな。

（留奈 side）

『いいから、留奈はこれ着て部屋に戻ってろ』かあ。

スカイはいつもそう、自分のことは二の次。いつも周りを優先する。優しい人。

今さっきも私を優先してくれた。

あれは私やスカイのように稀少な能力をもった人たちを集めて、教育・育成していた”J A E C”時代のこと。



「おい！その生徒！いますぐ武器ちからを納めろ！」

「う、うわああ！」

あるガンナーの能力を持った生徒の武器が制御不能状態に陥った。制御不能を言うより、制御の仕方が分からなかったと本人は言っていた。

制御が出来なくなった武器を持った生徒は発砲。

「キャアアアアア！」

「うわあああ！」

「生徒は全員、一時退避！」

退避したとはいえ、発砲された弾丸は何人かの生徒に命中していた。そしてその中にスカイも。

スカイはその命中した生徒の中で一番重傷、左の二の腕を貫通していた。

歳は9〜10歳、その歳で二の腕を貫通とは、相当の重傷。直ちに手当をしないと死に至るかもしれない。

…それなのにスカイは、自分の手当てより先に周りの軽傷者の手当てを優先させた。

周りのやつは「レベルDがヒーロー気取りか」とスカイを軽蔑していた。

スカイは成績の方もいつも残念な結果で、どっちかと言うと…嫌われてた。

嫌われるようなことは何一つしていない。むしろ好まれて当然のことしかしていない。

なのに周りはスカイを嫌った。
でも、私はそんな、人を思いやるスカイのことが大好きだった。



いつの間にか自分の部屋の前まで来てたなんて気がつかなかった。

「うゝ、寒い」

でも、そんな言葉とは裏腹にスカイの上着は温かった。

私はベッドに入り額の所まで毛布を掛けた。

そして毛布の中で一つだけ思ったことがある。それは――

（私は昔から、スカイのことが大好きなんだ）

side out

「留奈と話してたら、”J A E C”時代のことを思い出したな。

――思い出したくない思いでなんだけどな。

あそこにいた時のせいで、俺は他人との接し方を忘れた。

忘れた？違う、接したくなかったんだっただけ。

ヒデや金出はあちから声を掛けて来てくれたから別だが、

正直なところ……関わるのが怖い”。また前みたいに軽蔑されるんじゃないか。

そんな不安が消えない。いつもいつも……

「……やめよう、あの頃のことを考えるのは」

『特に用があるわけじゃない』……この言葉は偽りだと言う事に今気がついた。

俺はずっと不安でいっぱい、一人になりたかったのかもしれない。一人がいい、でも孤独にはなりたくない。

「俺は……どうしたらいいんだよ……」

翌日

（留奈side）

「スカイ…起きてる？」

「ああ…起きてるぞ…」

「昨日は、ありがとう」

なんだか、今になって緊張する。なんでかな。

「ああ…俺の方こそ…すまなかったな」

あれ？寝起きとは言え、何か調子悪そう…

「…スカイ？ちょっと顔色悪いよ？昨日いつまで屋上にいたの？」

「…つい…さっきまで」

！？

「ええ！？だめだよ無理しちゃ。今日は休んだ方がいいよ？」

「…そうか…？」

「ええ、先生には私から言っておくから、今日は寝ておくこと。いい？」

「…留奈——」

ん？なんだろう？

「——いや…何でもない」

「…そう？じゃあ寝てること。いいわね？」

「…ああ」

「じゃあ行ってきまーす」

Side out

留奈は…俺のことをどう思ってるのかな？

やっぱり、嫌いなのかな。

それとも、好きなのかな。

…俺は考えるのをやめた。

留奈の言う通り寝ることにした。



「んあ？ふあゝあ…」

時計を見ると時刻は12時43分。

今思うと、身体が若干楽になってる気がする。

「あ、起きてたの？」

「留奈！？どうしてここに？」

「…スカイが心配だから戻って来たのよ」

「…ありがとな」

「は、はい。ご飯作ったから、これ食べて」

「ん？留奈は？」

「もう食べたわ」

「ふん」

俺は留奈の作ってくれたご飯を食べることにした。

「な、なあ留奈」

「何？」

「戻らないのか？」

「ええ、食器の片付けとかもあるし」

「…俺のこと…嫌いだろう？」

「え！？」

「お前ならわかるだろ？」 J A E C ”で俺がどう思われてたか…」

「…」

「留奈も俺のこと、嫌ってるんだろ？」

「き、嫌ってないよ！」

「…そうか」

「どうしたの？急にそんなこと…」

「…いや、なんでもない。今のはなしだ、忘れてくれ」

それ以降、俺と留奈は一言も話さなかった。

留奈が教室に戻って行き、俺も寝ることにした。

翌日の朝まで、俺は起きることはなかった。

N o. 6 消えない不安 スカイの過去と悩みの真相（後書き）

凄いグダグダでしたね

自分でもよくわからなくなっちゃいました！

次の更新がいつになるかは分かりませんが

次回も、そしてこれからもよろしくお願いします！

No. 7 変わるのか？

「…ん？…もう朝か…」

部屋を見渡す。どうやら、留奈はもう教室に向かったらしい。
まあ、今はそっちの方が好都合。ちょっと気まずい雰囲気だからな。
そいや俺、昨日風呂入ってないな。シャワー浴びて行くか。

くところ変わってヒデside)

(…：こりやえらい情報ゲットしちゃったな…一刻も早くスカイに
伝えてやりてえけど…)

「スカイ…遅えな」

ここは教室。秋ちゃんも留奈ちゃんも来てないから話す相手がいない
状況。

つとか思ってたら留奈ちゃんキターーーー！

「ほ、星之江さん。お、おはよ」

「あ、うん。おはよう」

ん？何かいつもの凜々しさと言うか何というか…って感じがしない。
何かあったのか？

あれ？確か留奈ちゃんはスカイと同じ部屋なはず…

「あれ？スカイとは一緒じゃないの？」

「!!（ビクン）」

おっやゝ？これは俺の予想だと…スカイと何かあったな。喧嘩？

「どしたの？スカイと喧嘩でもした？」

「い、いや。違うの」

違う？じゃあ何だ？

…まああまり他人のそういうのを探るのはあんまし良くないよな。
ここらへんでやめとこ。

「ふうん、そっか」

あのスカイだ。二日も連続で休むはずがない。
今日は来るだろう。

（side out）

「ふう」

ん？何か凄く嫌な予感。

俺、壁に掛かっている時計を見る。

短針が指すは8をちよつと過ぎたあたりのとこ。

長針が指すは丁度8のとこ。

つまり今の時間…8時40分。

HR開始時間…8時40分。

「ぬあああああああ!!」

急げ俺！急げ俺！

クソ！制服のボタンがなかなか上手く止まらない。
えーと、カバンカバン！

あ！髪乾かしてない…もう別にいいや！
よし準備完了！お得意の光速移動で教室へいそ——

「——げ！」

クラスのみんなが俺を見ている。

！？再び嫌な予感。
教室の時計を見る。

「8時44分21秒ですよー（棒読み）」

「何で…あんたが…？」

「また説明しないといけないんですかー？面倒ですねえー（棒読み）」

いや、先生が面倒臭がったらだめでしょ…

そんなことより、何で潤がここに？

「今日からここの担任になったんですよー、だからここにいまーす
（棒読み）」

…俺は今、周りから見ると物凄く嫌な顔をしているに違いない。
実際、この人が担任…考えただけで嫌になる。
まあいい、もう考えるのはやめよう。
とにかく席に着くか。

「それじゃあーHR始めまーす（棒読み）」

「起立、礼——」



「まったく、あいつの話は聞いてて疲れる…」
「だよなあ、何か疲れるよな」

HRという短時間でさえ疲れるのに、授業だと考えたら…
無理だ、俺の中の何かがダメになりそうだ。

「ふふ、スカイ君相当お疲れみたいだね」

「…アキは大丈夫なのか？」

「私はあの人、嫌いじゃないかな」

「…それ、本当で言^{マジ}ってる？」

「うん！」

「は、ははは…」

もう、笑うしかねえ…

「お！そおいやスカイにビックニュースがあつたんだ！」

「ん？何だ？」

「”例”のトーナメント、開催決定したそうだぞ？」

「…えっと、例のトーナメントって何？」

「…はあ、あれだよ、レベルSのヤツ！」

レベルSのヤツ？…！！

「あゝ！レベルSのヤツね！そうか、へえ、そうなんだ」

「なんだよ、その反応…」

「いや、そのトーナメントがあるってのはもうこっちに報告来てっから」

「え！？」

いや、そりゃそうだろ。レベルS本人に聞かないってどんだけよってなるよ!?

「え? そんなトーナメントがあるの?」

「ああ、アキは知らなかったんだっけか?」

「スカイ君はその大会に出るの?」

トーナメントは大概が参加自由制。でもレベルSはこの機関に4人だけ。

なんやかんやで強制だったんだよね。うん。

「ああ、だから応援頼んだ!」

あれ? アキとヒデが無言になったのは何故?

「あ、うん。頑張ってたね」

その時、授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

あゝ、暇になるなあゝ。

と! 言うわけで、暇な時間はカットしちゃったZE☆

時刻は13時前

「はら減ったゝ、ヒデ、食堂行くぞお」

「おう」

で、事件とは言わないけど、ここでちよつとしたアクシデントが発生するわけですよ!

俺が廊下の角を曲がろうとした時。

「おっと！」

「うぎゃあ！」

ん？誰だこの子は？

身長は俺の方が上って、女子で俺より大きい人滅多にいないか。

「あ、すみません」

「いやいや！謝るのはこっちの方だよ！ごめんね」

「は、はあ」

「君は歩上くんだね！私は白月しらつき 笑わらいってゆくの。よろしくね」

…やけに可愛らしい子だな。でも同じ学年ではないよな…？
1こ下か？

「笑！早く行くよお」

「ってかあの子、歩上くんじゃない！？」

てのが聞こえるのは恐らく気のせいだろう。

そう思わせて！

声が聞こえなくなったってことはどっか行ったな。

「今の人も可愛いよな、白月先輩」

「先輩？ってことは俺より上か…見えんな」

「俺の中では今の先輩も10本には入るレベルだぜ」

「10本？何の？」

「何のってこの機関の美女の10人のことだよ」

「ふーん、まあ可愛かったな、他には誰がいるんだ？」

別に興味ないけど何か流れで聞いてみた。…本当に興味ないからな、マジで！

だって他に話しなくなったら困るだろ？
その場の状況判断ってやつだ。

「ここの生徒会副長の成揺なりゆり 三玖は俺の中で2位の可愛さだ！もうヤバいぞ？マジで！」

え？何？あ、アツいんですけど…ちよっとやめて…

「他には4年の空夏院くうかいん 零式先輩、同じ学年の黒宮くろみや 明葉あきは——」
「お、おお…」

そんな話を食事中もされた。

その結果、1位は留奈だそうです。そんなもって10位の中にアキも入ってるそうです。以上！

本当にそれだけしか分からなかった…
知らなくてもいい情報だけだな。

「——でよお！俺はあんまり好きじゃないんだが、風桐かぜきり 春風はるかぜっていう4年もなかなか可愛いんだよ！」

「へえ…じゃあ何で嫌いな？」

「嫌いじゃねえけど…ってか俺が見た目だけで判断してると思うてるだろ？」

「え？違う！？」

「違えよ！」

何か、こいつのこと嫌いになっちゃったカモ♪

「可愛いと思ってんなら付き合えばいいじゃん？」

「…そんな簡単に言うなよ。お前みたいにカッコいい奴ならまだしも、俺みたいなやつが簡単に付き合えるわけないだろ？」

「俺だって付き合ったことなんて一回もねえよ」

「…マジか!？」

付き合う…って感情が、好き…って感情が、いまいちわかんねえんだよな。俺。

そりゃ可愛いとかは思うけどな？それとは違うだろ？わかんねえけどよ…

「…留奈ちゃんとなったりすんなよ？」

「へ？」

「いや、何でもない」

ん。まあいいけど。

そしてなんやかんやで時間は進み、時は放課後。

「こおゆう時の暇はいいもんだな」

ちょっとそこらへんでもぶらぶらしてくるか。

留奈が帰ってきてても気まずいからな。

そうだ！この時間帯に屋上に行ってみるか！



「おや？」

「ん？おお！歩上くんじゃないか！昼と言い今といい、運命を感じるね」

「は、はあ。そうですね」

「あ、感じてくれる？ありがと。えへへ」

まさかの白月先輩。

この陽気な口調にペースを持ってかれるな。

「こんな所で何してるんですか？」

「へへへ、ここは私だけのお気に入り場所なんだ。いつも授業が終わるとここにいるの！」

「そうなんですか、実はですね……」

いや、俺が夜ここにきていることを話すのはやめよう。

「ん？何？続きは？」

「いえ、何でもありません」

「何それ」。先輩に隠し事とは、勇気あるねえ」

や、やばい気がするのは気のせいかな！

「……まあいいや。歩上くんは私のお気に入りだから♪」

「え！？いつお気に入りになったんですか？」

「ん、今かな」

な、なんとまあ。でも、こうゆう人、嫌いじゃないけどな。

「へへ、じゃあ私はそろそろ帰ります！」

「あ、そうですか？」

何か悪いことしちゃったな。俺が来たからか？

「まあ、これからも会ったら声掛けてくれると嬉しいな。えへへ」

「……分かりました。声掛けます」

……ってなってるのは別に先輩の微笑みに見とれてたわけじゃねえぞ

？いいやマジで…

「では先輩、おやすみです」

「ふふ、ちょっと早いけどね。それと先輩はやめて、笑でいいよ？」

先輩にそんなこと言われたら…ちょっといいかもな。
てか、俺と先輩、かなり親しくなってるなあ。

「そうですか？じゃあおやすみです、笑先輩」

「その代わり！」

…何の代わり？

「私も歩上くんのこと、スカイクんって呼ばせてね？」

「あ、ああ。全然いいですよ。俺もそっちの方がいいですし」

「それは良かった！じゃあね、スカイクん♪」

そう言うと笑先輩はこっちに手を振って、扉を開け、階段を下りて行った。

ああゆう先輩は絶対に人気あるよな。

元気があって、明るくて、接しやすくて…

いかんいかん！何を考えてるんだ俺は…

「何か最近俺、変わった気がするなあ。何かが…」

俺も…変われてんのかな。

変われんのかな？

「留奈に、謝らねえとな…」

俺は留奈が居るであろう自室に向かった。

あれ？自室の前まで来たのはいいけど、カードキーがない！
いつもは財布の中に入れてんだけど、やべえ。マジでないわ。
こっちのポケットか？ない、それともこっこのポケット――

「スカイ…？」

「あ、留奈」

「えっと、何してるの？」

「カードキーなくしちゃってよ…」

「あ、入口の棚のところに置いてあったわよ？」

…今思えば^{フラッシュユースト}光速移動使えばキーいらねえわ！
今日は急いでたからキー取らなかったわけか。

「開けるわよ？」

「お、おお。ありがとう」

あゝもう、今日は何か…ダメな日だな。
まあいい、とりあえず部屋に入ろう。そんでもって留奈に謝らねえ
と。

「留奈」

「えッ!？」

そんな、名前呼んだだけでビクッとしなideくれ。

「昨日は、悪かった…」

「え! そんな、謝ることないわよ!」

正直俺も何に謝ってるかわかんねえけど、とにかく謝らねえと気が済まない。

「昨日のことなら気にしないでいいから…ね？」

「…ありがとう」

はあ、良かったあああああ！

これで気持ちいい空気は解消されたはずだ。

そんで、その後は普通に飯食って、シャワー浴びて、普通に寝たわけだが、今日は何か出来事が多い日だったな。

N o. 7 変わるのか? (後書き)

相変わらずグダッてますね(汗

因みに途中で上がった生徒の名前ですが、皆のちに登場します!

評価・感想の方をよろしくお願いします。

No. 8 レベルストーナメント直前 肩慣らしの相手はミストガーレン（前妻

今回はちょっと少なめです。

その上 gsgsdです…

No. 8 レベルSトーナメント直前 肩慣らしの相手はミストガーレン

「――カイ、起きて。遅刻するよ?」

何だ? 声ができる。恐らく俺を呼んでんだろうけど、もうちょつと寝たいな…

「スカイ、本当に遅刻するよ? ほら起きて!」

そう言っ、留奈は俺の体を揺すってくる。

頼む、もうちょい寝させてくれ…

「もう8時半回ってるわよ!」

「…えっ!? 嘘だろ!! 寝過したああああ!!」

クッソオオオ、もうちょい早く起こしてくれりゃいいのに。

「今のは嘘よ。今の時間は8時前。それでも早く準備しないと、スカイ動きが遅いから…」

「今、さらっとヒドい事言っただよな…」

「気にしない気にしない! 朝ごはん作ってあるから食べてね? 私はもう行くから」

そんな、冷たいこと、言うなよ…

ま、まあ口を聞いてくれるだけいいけど。

「おお、行っであゝ」

んじゃ俺も朝飯食うか。時間はまだ余裕あるからゆっくりしよう。

俺は留奈の作ってくれた朝食を食べ始めた。

（数十分後）

良し、飯食って、歯磨いて、着替えて、その他いろいろ…を終えて、
出発準備OK！

「そんじゃ行くとすつか！——つとお」

「おおスカイ、相変わらず突然な登場だな」

「まあ光の速さだからな」

「そうだな。あ、今日集会あるらしいぞ？」

集会だあ！？面倒臭えよおお…誰だあ事件起こしたやつう、出てきなさい！

見たいなのは嫌だぜ？

「まあ話によるとトーナメントの事らしいけどな」

「トーナメント？ああ、レベルSの？」

「だろうな。さあ俺らも体育館に行くとしようぜ」

テクテクと体育館に向かってた俺らなわけだが、体育館入口の所で
笑先輩と遭遇した。

昨日と言ひ今日と言ひ、よく会うな。

「あ、スカイクン！おはよ♪」

「笑先輩、おはようございます」

横にいるヒデがむちゃくちゃ羨ましそうな顔してる。ちょっとウケ

る。

「昨日と言い今日と言い、よく会うね」

「あ、それ俺も思いました」

「何か運命を感じるね♪」

運命？どおゆうコト？

「笑い、早く行くよお」

「あ、待ってえ。じゃあねスカイクン♪」

「あ、はい」

そう言って笑先輩は呼ばれた方に走って行った。

「…いいよなお前」

「え？何が？」

「白月先輩と仲良くて、笑先輩なんて呼んで親しくなって…はあ」

「まあ…落ち込むな、お前にもいずれ転機が来るって！」

「…バカにしてんな？」

してねえよ！っと言ってやろうと思ったらヒデは一人で先に行ってしまった。

すぐにすねて…子どもか！！

そんな気持ちを抱えたまま体育館に入り、整列した後、機関の最大の権力者である理事長…ではなく理事長代理として生徒会長が話を始まった。

え？なぜ理事長ではないのかって？俺に聞くな。そういうところは気にしたら負けだ。

「え〜どうも、生徒会長を務めている夜明^{よあけ} 大和^{やまと}だ。今日、皆に集

まってもらったのは他でもない、今月末のトーナメントについてなんだが――」

今から会長さんから告げられる情報、レベルSトーナメントのことだろう。レベルS以外の生徒（ヒデを除いて）は知らないのか。

「――今月末のトーナメントは特別トーナメント：レベルSのみのトーナメントを開催する！レベルSの生徒は強制参加とする。レベルSの生徒はトーナメントに備え、最善を尽くし、頑張ってくれたまえ、俺からの話は以上だ」

その後、教師からの報告や指示があり、生徒たちは解散したあと、各々の教室に戻った。

もちろんその後は、面倒臭い授業が俺たちを待っていた。

トーナメントは今月末：ざっとあと10日（正確には12日だった）。その時間で調整しろってか？

無理じゃないけど、最近全然動いてなかったからな。どうしよう…そんな事を授業中ずっと考えていた。

考えた結論、霊音に稽古の相手を頼むことにした。

「え？僕に稽古の相手を？」

「ああ、俺の知り合いで、お前以上の剣術を持ってるやつはいないからな」

まあ潤うるおいの方が剣術は上だが、教師だし、あいつに頼むのは癪に障るからな。

「僕はいいけど、相手になるか分からないよ？」

「そんな本気の勝負じゃない、ちょっと身体を動かすだけだ」

「そう？まあいいんだけどね」

「助かるよ、じゃあ第7グラウンドアリーナ借りてくるから、霊音は先行っててくれ、たぶん」

「わかった、じゃあ頼んだよ」

そんじゃ、ちよっくら頼みに行くか。

俺は許可管理室と言う特別な部屋に向かいアリーナの許可をもらいに行った。



「よう、待たせたな」

「全然オッケー。僕はいつでも出来るよ!」

なんやかんやで霊音も楽しみにしてんじゃねえか。

「よし、能力発動変化完了!」
エフエクティッド

「行くよ! 僕の相棒、ミストガーレン!!」

こうして、戦いの火ぶたは切って落とされた。

N o. 8 レベルSトーナメント直前 肩慣らしの相手はミストガーレン（後妻

如何だったでしょうか？

上記の通りgdgdでしたね

評価・感想の方お願いします。

N o. 9 驚異の分身 気持ちが強さに変わる時（前書き）

前回の続きです。

そして前回同様短いです。

では、どうぞ

No. 9 驚異の分身 気持が強さに変わる時

霊音の能力、ちからミストガーレン、またの名を霧影刀。

霧の分身を作りだし、フェイクを掛けたり、視界を塞ぐ事も出来る。霧で作りだした分身は攻撃も可能で、これが意外に厄介。今は知らないが昔の分身の最高数は一度に3体まで。

今は一体何体になったのか、注意が必要だな。

ちなみに見た目は全く変わらないから、これも厄介の要因。

「行くよッ!! スカイ君!」

「いつでも来い!」

一体目の分身は正面から、二体目と本体は左右から。もつとも、どれも本体じゃない可能性もあるがな。

正面の分身：お前から来なくても——

「——俺から行ってやるよ!!」

フラッシュアップ光速移動で目の前に移動、身体を斬り裂くが霧となって消えた。やはり分身だったか。

一体目を消す間に左右の二体は俺に接近中。

「んなモン、近づかせるワケねえだろ!」

俺は刀を振り、刀から光の斬撃を放ち、二体を斬り裂く。その二体は一体目同様、霧となって消えた。

「二体とも分身か…」

「こっちだよッ!」

声のする方は…上!?!?
よし、もう一発——

「この瞬間を待ってたよ」
「な、何!?!」

気が付けば俺の周りに三体の分身が、切っ先をこちらに向けている。
さ、刺される!

「——なんてな」

「やっぱり、光はそんなに簡単に捕まえないか」

光速移動、やっぱり便利だわ、これ。

「でも——」

「でも?…!?!」

そんなバカな…!?!?

「——それもお見通しだよ」

再び俺の周りに三体の分身が…なんて速さだ。ありえねえ!

「おら!」

「くッ」

一体は斬り消し、一体は蹴り飛ばした。
しかし、一体は…

「あがッ」

「背中までは腕が回らなかったみたいだね。ここから一気に畳み掛けるよ！」

「させるかッ！」

光の斬撃で残り一体を消した。

っと思ったら今度は後ろに！

消した後の分身を出すスピードが半端ない。

俺は三体の攻撃を横に回避。

縦に三体並んだ状態で光の斬撃を放ち、三体とも消し去る。

「こんなレベルで息を上げちゃダメだよ！」

「クソ、何か変だな…光速移動が連発出来ねえ」

やっぱり毎身体動かさないとダメなのか？

「そんな言い訳はなしだよ！」

クソ、俺の不調に関わらず攻撃してきやがる。しかも結構なハイペースで。

分身を消しても消しても出てきやがる。

霊音のやつ、前よりはるかに強い。

だが、レベルSの意地として、負けるわけにはいけねえんだよ！

「オラオラオラッ！！」

「攻撃のスピードが上がった！？」

それでも、分身が場から消える事はねえか、なら——

「一気に消すまでだ！」

「ん？刀を地面に刺して、何をするつもり？」

「へ、まあ見てろ！」

行つくぜえ、俺のとおっておきい！

「ライトクエイクッ！」

「…なッ！？」

と、次の瞬間、分身達の足元から光の針が突出し、分身達を抹殺した。

「そんなでもって、お前が本体か？」

「しまっ——」

俺は本物であろう霊音を斬りつけた。

「うああああッ！」

斬り飛ばされた霊音は2、3メートルほどの所で地面についた。

そして地面をゴロゴロと転がる。

エフエクトシールドエネルギー

ESEがなくなれば、これ以上の戦闘は出来なくなる。

果たして霊音くんのESEのは残っているのかな？

「ふう、スカイ君の攻撃は一撃が重すぎるよ」

「そんなもんだろ？」

「ESEが、600ちよつとがもう72しか残ってないよ」

「俺はまだ…596あるな」

「…もはや反則だよ」

「そんなことはない、ちゃんとフェアだ、でもまあここで終わりにするか」

「クッ」

今更逃げたって、光には勝てないぞ？ そんじゃ終いとしようぜ？
光速移動で霊音の目の前に。俺の拳よ、霊音の腹を貫け！ なんつて。

「がはッ」

「はいしゅーりょー」

「な、殴りなんて…」

「殴りに文句があんのか！？ 勘弁してくれよ」

それから1時間くらい練習に付き合ってもらったわけだ。
腹が減って死にそうだ。…いやマジで。

光速移動が連発出来ないのは、日頃連発してなかったからに違いない。

そんな感じで練習は終り、自室に戻ることにした。

戻ってシャワー浴びて、食堂行って、寝る。

完璧なプランだ。

「ただいまあ」

「おかえり、遅かったわね」

「トーナメントに向けて練習してたんだ」

「そうなの、頑張ってたね」

「おう！ ちょっとシャワー浴びてくる——」

なんか、今日は疲れたな。レベルSトーナメント。マジになってみるか。

N o. 9 驚異の分身 気持ちが強さに変わる時（後書き）

なんか前回と言いい今回と言いいg d g dですね（汗
駄文ながら、自分なりに頑張っているので温かい目で見て頂けると
嬉しいです。

評価・感想の方よろしくお願いします。

No. 10 目標…そしてヒーロー

霊音との訓練もすでに10日が過ぎ、レベルSトーナメントを間近に迎えていた。

もう10日も訓練しているのに、未だに光速移動がしっくり来ない。フラッシュユースト連発は出来るようになったが、時々発動できない。今日もそのせいでダメージを受けかけた。

sonで、今は訓練終わって食堂に向かっているとこ。今日は結構遅くまでしてたから、今は9時半をちよつと過ぎたくらいだな。

この時間なら食堂にはあまり人はいないだろう。

そんな事を考えているうちに食堂についた。

予想通り人の数は少ない。いて15人くらい。

「いらっしやい。歩上くん、今日は何にする？」

「お婆ちゃん、こんばんわ。今日は——」

常人とは思えない量に対してお婆ちゃんは全然驚かない。

流石にもう慣れちゃったかな？

お婆ちゃんだから5分も掛からないだろうな。

その時、俺は誰かに呼ばれた。

「君は、歩上君…ですよね？」

誰だ？この人は。見たことあるような、ないような…

「あ、私の事知りませんか？」

これで「はい」って答えたら失礼だよな。もしかしたら会ってたかもしれないし。

どう答えよう：頼む、おばちゃん。今俺の札の番号を呼んでくれ！

「でも、実際に会うのは初めてですよ。私は生徒会副会長の成揺なりゆり三玖みくです。よろしく」

「あ、副会長さんでしたか。初めまして、歩上スカイ 大空です」

「ふふ、知ってますよ。今回の特別トーナメント、頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます。それと、敬語じゃなくていいですよ？先輩なんですし」

「いえ、私は誰にでも敬語を使うですよ、慣れてしまっ

「そうですか。：いつもこの時間に食事を？」

今は9時半過ぎ。こんな綺麗な人がこんな時間に来るとは、ちょっと驚くな。

てか、俺は構わないんだが、俺の横の席で食べるの？同じテーブルで？

ちょっと緊張するな。なんせ初対面だし、話したことないし：

「いえ、今日は生徒会の仕事が長引いてしまっ

あ、そゆコトね。生徒会も大変だな。

「歩上君はいつもこの時間なんですか？」

「はい、あまり人のいる時に食べるのは好きじゃないんで」

「あ、それじゃあ私は移動しますね。すみません」

え？もしかして俺の一言でそんなことになっちゃった！？

「あ、すみません！そんなつもりで言ったんじゃない——」

「いえいえ、いいんです。それじゃあ」

あわあわ、しまった。これじゃ俺が最低のやつって先輩の中で想われてしまう。

「待ってください!」

「え?」

「一緒に食べませんか?」

「え?でも、迷惑なんじゃ…」

ど、どうする俺! 考えろ、まずは深呼吸だ。

「スウー、ハア…」

「?」

よし! 流れってのは大切だ。この流れで! …どの流れ?

「たまには誰かと一緒に食べるのも、いいかなあって思って」

「そ、そうですか? なら是非」

「歩上くん、出来たわよ」

おぼちゃんか、ん? 頼んでない料理がある。おぼちゃんが間違えるなんてありえない…どした?

「成揺さんも出来たわよ」

「あら、私のも一緒に出来た見たね」

「そうみたいです」

というわけで一緒に取りに行くわけだが、明らか俺の方が量が多く、俺は3分割しないと全部持っていけない。

困ったもんだ、先輩が「手伝いましょうか?」と言ってくれたが流

石に先輩に手伝わせるわけにはいかないから断った。

「歩上くん、副会長さんを落とすなんてなかなかやるじゃない」
「？別に落としてないですよ」

落とす？どゆ意味だ？

「待たせてすいません」

「いいですよ。…いつもそんなに食べるんですか？」

「はい」

ん？今若干、先輩が引いてるように見えたのは気のせいだよな？

「それじゃあ、頂きましようか」

「はい、俺もう腹減って倒れそうです」

「ふふ、歩上君は面白いですね」

「そうですか？」

それで食べ始めたわけだが、何か…見とれてしまう。

食べる仕草や笑った時の顔や仕草、何故か見とれてしまう。

「どうかしましたか？」

「え？いや、何でもないです」

何か話題を探せ、この空気は何かがまずい気がする！

「あ、先輩は何で生徒会に入ったんですか？」

お？我ながらいい質問じゃないか？

「ん、そうですね。皆に勧められたのがありますが、会長を、いやあの時は副会長でしたね、大和会長を見てると『あんな人になりたい』って思ってた生徒会に入っただけですよ」

「あの人（会長）ってレベルSじゃないんですか？」

「あ、いや…」

ん？何か訳のある気がする。もしかして聞いちゃいけなかったことだったか！？

「会長は面倒臭がりなんですよね」

「…え？」

「レベル値測定検査でも本気出すのが面倒臭いって、トーナメントに出るのも面倒臭いって…正直なところ、私も会長の本気を見たことないんですよ」

「…そんな先輩の事を何で目標みたいな存在にしたんですか？」

「…会長は普段は面倒臭がりですが、実際は凄い真面目な方なんです」

「…」

「私が4年の時、6年の先輩に絡まれた時、5年だった会長が助けてくれたんです。その時が会長との初めての出会いでした」

「それを見て？」

「はい。その時も本気じゃなかったみたいです」

「そのことは本人から？」

「はい、会長は私の中の目標であり、ヒーローです」

ヒーロー…か。会長さんが羨ましいよ。1人だけでも自分の事をそう見てくれる人がいてよ。

「俺が羨ましいか？」

「ああ…って、あんた！」

「会長！」

まさかの本人登場！？

「おい、歩上か大空か知らないが――」

り、両方あってる…ツッコむところ？

「俺の三玖に手え出したら殺^ヤっちゃうぞ？」

「ちよっと会長」

「…だ、出すつもりなんてないですよ」

こいつの気迫…大海とは比べ物にならない…俺が恐怖を感じるなんて、久しぶりだぜ。

「…フン、まあいいけどよ、こいつはもう俺色に染まってるぞ？」

「え？…！？」

「ん！」

…えっと、俺の目の前で何が起きているのか。俺にもイマイチわからん。

わからんが、物凄おくディープな事をしている気がする。

「んふ、んちゅ…んんっ…んうんっ…」

これは…俺は帰ればいいのか？絶対に見てはいけないものだよね？
こういうのは。

会長さんはガツガツ行ってるが、先輩はちよっと抵抗している。
って何冷静なこと言ってんだ俺は！

「んう…んんっ…ちょ…と……こんな…ところ……ダメ…んちゅ…
…」

「…ふう、っと言うわけだ」

どういうわけ！？もう何が何だかわかんないんですけど！

「こんな女でも良けりゃくれてやるぞ？」

「なッ！？」

いや、そんなこと言っているのか？そんなこと言われたら先輩だつてキレるんじゃない？――

「ほ、本当にそう思っているんですか？」

うわ、あの涙目＋上目遣いは男なら簡単に死ねるな、ありや。

「思っているわけないだろ？三玖は俺のもんだ、誰にもやらねえよ」

…何イチャイチャしてんだよ。俺は一体どうすればいいんだよ！
もういいや、さっさと飯食って帰ろ。

「あれ、歩上君、もう帰るんですか？」

もうってどういう意味？いてほしいの？

「はい、今日はちょっと疲れてて、お先失礼します」

「おい、歩上！」

なんだよ、俺は早くこの空気から脱出したいんだよ。呼び止めんな。
どうせ自慢にならない自慢でもしてくんだろ？うな。

「まあ、頑張れよ」

「え？あ、はい…」

それを最後に会長さんは先輩を話を戻した。

先輩も最後に少しお辞儀をして、会長さんと話を始めた。

なんやかんやで、やっぱり生徒会になってるだけはあるよな。

シュピーンって感じで自室の前に光速移動。最近はいつもこんな感じ、突然部屋に現れたらビックリするって留奈に言われてからずっとだ。そんでもってカードキーでドックを解除。

「ただいま…？」

あらまあ、留奈はもう寝ちゃってるわ。俺もシャワー浴びて、さっさと寝よ。

く時は流れ風呂上がりく

そう言えば後2日後か…トーナメント。

出来れば勝ちたいな…

…勝てば、ヒーローになれるか？

N o. 10 目標…そしてヒーロー（後書き）

なんか途中、変な感じになっちゃいました（汗
本当にすいません、これから気を付けます
評価・感想の方お願いします

No. 11 最悪なアクシデント

「おらッ!!」

「うわ! あ、危ない…」

今はレベルSトーナメント前日の放課後、第5アリーナでいつもの如く霊音と訓練中。

何か最近は、俺の訓練というより霊音の訓練になっている気がする…まあ今のところ触れてはいないが。

フラッシュユースト
「光速移動…正直鬼畜だよね…」

「鬼畜で悪かったな」

「後ろッ!!」

「これで終わりだ!」

俺は霊音を斬り裂いた。

が、結局は分身って落ちだ。…ん?

「き、霧?」

今の分身を斬った瞬間、俺の身の周りが霧で覆われた。どうなってんだ?

とにかく出るしかない、視界を奪われちゃ戦えねえ。

「よっつと!」

「…この瞬間を待ってたよ」

「な——」
トライアングル テンベスト
「三角形の嵐!!」

クッ!!な、何故!?!光速移動について来れる筈が:
しかも、一度に三回も斬られた!?!これはマジでヤバイ!

ゴロゴロ:

「つと!ふう:こりや驚いた。ESEを大分削られちゃった」

空中にモニターを表示させる。ESE残量223。400程削られたか:

それにしても何故:

「不思議そうだね、何故攻撃が当たったのかって顔をしてるよ?」

「不思議に思ってるからなあ。一体どうやって?」

「簡単さ。スカイ君を霧で包む。すると君が光速移動で脱出したルートがわかるって仕組みさ」

:なるほど。俺が脱出するとその部分の霧が俺を追って場所を特定されるってわけか。

そこに分身を出して技を決める。やられたな。

「なるほどねえ:」

「あれ、今の説明だけでわかった?流石スカイ君だなあ」

「:その技、残念ながら俺にはもう効かなねえよ?」

その技の種をバラしちまったら、回避方法くらい簡単にわかる。じゃあなんでバラした?ま、どうでもいいけど。

「それは:どうかな?」

「これが僕が出来る最後の訓練だよッ!」

何が来る?…ってオイッ!

「何だこの人数はあああッ!!」

ざっと数えて20はいる!?

これが霊音こいつの分身のMAX!?

「くたば…ッれ!!」

刀を地面に突き刺した。これは地中から攻撃を仕掛ける時のモーシヨンで、この技で半分は消える筈。

予想通り半分以上が消えた。しかし分身を消した瞬間、さっきと同様に霧が俺を包んだ。

へ、何度も同じ手に引っ掛かるかよ。霧を出た瞬間にもう一度、いや二〜三度光速移動して態勢を立て直す。

……あれ?おかしいな、何度光速移動しても霧からでない。

「もう気付いたかな?」

「おい、これはどういう……」

「これも簡単な事さ、フィールド:アリーナ全体を霧で覆ったのさ」

な、何という!!

「そして、霧の中は僕の支配下、君は完全に不利な状況」

チッ、これはちよつとピンチだな。

さあ、どう打開する。

「考える隙なんて与えないよ!」

「うおおッ!」

危なねえ…ガードするのがあとちょっと遅かったら終わってたかもな…

こんな霧の中なのに霊音は俺の位置を正確に把握してやがる。

「おらッ！フンッ！消えろッ！！」

クソ、どんだけ振っても当たらんねえ。

しょうがねえ、あの技を使うか。あの技の後は隙が出来るからあんまり使いたくねえけど、仕方ない。

「おらああああアッ！！」

体を軸に回転し、その勢い、遠心力を使って剣を振る。

ただ剣を振るだけじゃねえ。振る瞬間に光の斬撃を放つ。するとバカデカイ円状の光の斬撃が放たれるわけだ。

「消え失せろおおおおオオッ！！」

「な…に——」

ドオオオオオンっと言う轟音と共に霧は晴れた。
しかし霊音の姿がどこにも——

「——っらあああッ！」

「危ねッ！！」

空からの霊音の攻撃をギリギリで回避した俺は一気に畳み掛ける。

「おおおおお——っら！」

「当たらないよ！」

斬撃を回避した霊音。勢いよく俺との距離を詰めてくる。
そして俺と霊音、同時に剣を振るう。

俺の刀と霊音の刀が交わり、金属音を出しながら火花を散らす。

「分身は…もう使わねえのか？」

「分身はもう限界なんだ…一度の能力発動変化で…出せる分身の量は決まってるんだ」
エフエクティッド

「なる…ほど！」

なるほどねえ。ま、制限なかったら最初っからMAXで仕掛けてくよな。

「スカイ君の方こそ…光速移動は使わないの？」

「俺…か？使うけど？」

俺は霊音の背後に周り背中を斬りつける。

「ぐあッ！クッソォ…！？」

振り返った霊音は驚愕の表情を浮かべているに違いない。
自分の真後ろにはすでに光の斬撃が放たれていたんだからな。

「うわあああああ——」

試合終了。今回はちょっと危なかったけど、また俺の勝ちみたいだな。

「ふう、やっぱりスカイ君は強いなあ。これなら明日のトーナメントも優勝できるかもね」

「さあな、それより今日は驚かされたな。あの攻撃：初見は絶対に回避できねえわ」

「へへへ、あれはとっておきだからね。スカイ君攻略のために考えた技なんだ」

「そうかい、まあ成功して良かったな」

「何？その上から目線」

見たいな感じで俺たちはアリーナを出て、俺はカギを返しに行き、その帰りに食堂による…ってのが最近の俺の日課。

ふゝ今日も疲れた。携帯で今の時刻を確認：10時前かあ。

明日トーナメントだから今日の訓練は少しだけって言ったんだがなあ。

「あら歩上くん、今日は何にする？」

「今日はうどん5杯、サバ煮込み定食3つ、シーザーサラダ3つ：だけで」

「あら、今日はちょっと少くない？」

「何か食欲でなくて…」

「明日トーナメントがあるんでしょ？大丈夫なの？」

何で明日トーナメントあるの知ってんだ？

誰かの話でもいいいたのか？

「まあなんとかあると思います」

「そう？無理しちゃだめよ？」

「ありがとうございます」

おぼちゃんは気配りが出来てこそだよな。

だからおぼちゃん好きだわあ（LIKE的な意味で）。

席に着く俺。よくはわからないが今日は成揺先輩は来ない気がする。

出来れば来ないでほしい。今会ったらちょっと気まずいわ。

…もうそろそろ出来るかな。

「歩上くん、出来たわよ！」

「はあい」

俺は料理を取りに行った。

その、横から声を掛けられた。

「あ、君は…」

「…はい？」

とだけ言葉を交わしてその女生徒は食堂を出て行った。
会ったことある人か？水色の髪が特徴的な人だったな。

「はい、これと…これも」

「お婆ちゃん、今の人は？」

「今の子？時々来るけど、名前まではわからないわねえ。でも4年生だった気がするわ」

「そう…ですか」

多分だけど…会ったことないよな。

やっぱりレベルSってのが大きいのか？

まあいい、早く食べて部屋に戻るとするか。

〳数分後〵

「お婆ちゃん、ありがと。美味しかったよ」

「そう？良かった。明日頑張ってね」

「ありがと、おやすみなさい」

部屋に戻ったらシャワー…ってこのくだりいつもしてる気がする…
今日は久しぶりにあそこ寄ってみるか。



「この時期は流石に寒いな…」

ここは屋上。少し前までは毎日のように来ていたが、最近は全く来ていなかった。

ここから見る景色…結構気に入ってんだよな。

とわ言え、流石に寒すぎる…もう少ししたら帰ろ…

鉄の柵に手を掛け下を覗く。結構高いな。ま、7階もあるからな、そんなもんか。

「…………ツ」

「ガハッ————」

俺は不意に後ろから後頭部を殴られ、屋上から叩き落された。

「???? side」

「歩上 大空…大したことない奴だったな、これならわざわざ上層部に頼んでまでトーナメントを開催してもらわなくても済んだのだ
が…」

その黒い布に身を包んだ男はそう言い残すと屋上から姿を消した。
その男の向かった先はスカイが落ちたであろう場所だった。

「?おかしい…」

そこにあったのは歩上が落ちた時に出来た跡と歩上のものではあろう血が。

その跡からわかる事は2つ。

1つは、確かに歩上はここに落ちたこと。

もう1つは、”誰かだ歩上を回収した”という事。

暗闇で確認することは難しいが、落ちた跡付近より少し離れた所に数滴、もう少し離れた所にも数滴、血が付いている。

7階の高さから落ちて自分で動くのはほぼ不可能だろう。

つまり、誰かが回収した、という1つの答えが浮かび上がる。

まあいい、相当の怪我を負ったに違いない。

少なくとも明日の大会は出場不可能だろう。

——だがそんなのでは駄目なんだ。

歩上には”死んでもらわなければ”——

side out

side

「が…がはっ…はあ…はあ…ごほっ…」

ひどい怪我…骨…5、6本は折れてる。

多分屋上から落ちたんだろうけど、これだけの怪我で済むなんて…

天空の光騎士君…凄いとしか言えないね…

そんなことより！早く歩上君を助けないと。

このままにしておいたら死にかねない。

でもあまり大きくは動けない。歩上君を落とした犯人がまだこの辺

りにいるかもしれない。

一先ず私の部屋に行って、応急処置だけでも――

side out

ああ…なんか変な感じだ…浮遊してるみたいな…
俺は…死んだのか…？い…しき…が…――

N o. 11 最悪なアクシデント（後書き）

今回はどうとうレベルSトーナメント開催です！

スカイは一体どうなってしまったのでしょうか？

そしてスカイを不意打ちしたのは？

救いの手を差し伸べたのは？

評価・感想の方よろしくお願いします

No. 12 レベルSトーナメント開始 歩上VS風桐

俺はゆっくりと意識を戻した。

体中に走る痛み。これが尋常ではない。本当に指一本も動かせない。まるで金縛りに会ってみたいに…金縛りになったことないけど…そして俺は瞳を開いた。

俺は驚いた。そこにいたのは食堂で会った水色の髪の女生徒だった。一体何故だ？

「あ、気がついた？」

「…あんたは…食堂で会った…」

「あ、覚えててくれたんだ、私は風桐 春風。よろしく」

…風桐…春風？前にヒデが言ってたな。

「よろしく…ここは？」

「ここは私の自室——ちょっと！」

訊いたにも関わらず俺は無理矢理にでも体を起こそうとした。が、その瞬間、身体全体に激痛が走った。

「痛ッッ！！」

「あまり動かないで！今はまだ応急処置しかしてないんだから！」

「応急…処置？」

「気付いてる？君の怪我…相当ヒドいよ？」

その言葉で、俺は今どういう状況か把握した…というより思い出した。

俺は誰かに殴られて…落ちた（ついでに意識も）。

俺の左手は四角い木片のような物と共に包帯で巻かれていた。：折れてる！？

恐る恐る右手に目をやる。処置はされていない。良かった、右手は生きてたか。

少し頭がズキズキする。手を当てると包帯が巻かれている。無理もない、頭を殴られたんだからな。

そして一番痛いのはあばら。ちよつと摩^{さす}っただけで激痛が走る。ここが痛みの大体の原因か。

「ほんと、君には驚かされるよ、7階の高さから落ちてそれだけの怪我しか負わないんだから」

「正直、自分でも驚いてますよ」

冷静に考えたら、7階から落ちて死んでない：って凄いよな。

「一体誰がこんなこと：心当たりはないの？」

「：」

心当たり：ねえ。特にないな。恨まれるようなことしてないしなあ。強いて言うなら――

「大海：とか？」

「大海先輩！？：多分ないわね」

「え？どうしてですか？」

「明日、レベルSトーナメントがあるなら尚更：彼は不意打ちをするような人じゃない」

「：って言うか――」

「何？」

「何で俺が不意打ち受けたの知ってんですか？よく考えれば落ちたことだって言ってますよね？」

「それは簡単、落ちてるところを見たから」

な、なるほど…

「不意打ちを受けたこと…これは君の後頭部に大きいコブが出来たのを見て、後ろから何かで叩かれたんじゃないかって。そうしたら落ちたことも納得いくし」

「…大した推理力ですね」

「こんなの推理に入らないよ…それより——」

ん？やけに重そうな表情してどったの？

「——この怪我じゃトーナメント出れないわね…」

「…あッ！！痛つつう…」

「君は当分の間、その怪我が完治するのに5ヶ月は掛かるかな？その間は絶対安静にした方がいいよ」

そんな…なるチャンスだったのに…ヒーローに、認められるチャンスだったのに…

「…そんなにガツカリしない！男でしょ？」

「…俺、そんなに落ち込んだ表情してました？」

「ええ」

「…出ますよ」

「無理言わない」

「出ます」

「出たら…本当に死ぬよ？」

「…」

「無理しないこと。このトーナメントにどんな想いを込めてるか私にはわからない。でもそれは君の命よりも大切な想いの？」

そんなこと…わかんねえよ…

「…きっとその想いを遂げるチャンスはまた来るわ」

来るのか？そんなチャンスが…

「今日はここで寝るといいよ。君の部屋の番号は？」

「…2402」

ちょっとした後、先輩が留奈と話している声が聞こえた。内容までは聞き取れなかったが。

気付かないうちに俺は睡魔に誘われ眠りに落ちていた。

（翌日）

（風桐side）

ここは自室。私は部屋に付いてるモニターで開会式を見物。

歩上君、あなたは何をしでかすかわからないから身動きできないようベッドと一緒にロープでグルグル巻きにさせてもらったよ。

トイレは我慢してね。

あ、生徒会長のあいさつが始まったわ。

「えー、これよりレベルSトーナメントを開催します。…以上」

あ、以上なんだ。

今度は副会長から対戦相手が発表させるみたいね。
歩上君には悪いけど始めさせてもらうわね。

「副会長の成揺です。これから対戦相手の発表を行います。第一試合！——」

モニターに表示された名前に私は心底驚いたわ。

そこには『歩上 大空 VS 風桐 春風』の文字が。

私の一回戦目の相手は出場不可能の歩上君。つまり私は不戦勝？

とにかく第一アリーナに向かおう。5分以内に行かないと私も不戦敗になっちゃう。

私がアリーナに着いたのは部屋を出て2分くらいしたころ。

アリーナに向かう途中で、歩上君には本当に悪いことしてるなあっ
て思ったんだけど、私にもレベルSとしてのプライドがある

から、今回の大会は^{トーナメント}負けるわけにはいかないの。

ごめんね、歩上君。

私がアリーナに姿を現すと同時に観客席が一気に沸きだった。

アリーナにある電光掲示板には2分34秒の文字が。多分残り時間
だと思う。

主催者に歩上君の事を言って不戦勝にしてもらおうかと思ったけど、
歩上君の事を知られるわけにはいかないし、私が知ってい

るのがバレルのも何かまずい気がしたからやめた。

時間はゆっくり、だけど確実に進んでいき、残り時間は1分を切っ
ていた。

観客席もざわざわし始めて、私も何か気まずい感じになる。私は小
さく溜め息を吐いた。

でも次の瞬間、観客席が一気に沸きだった。私が登場した時みたい
に。

私の脳裏に嫌な光景が浮かぶ。まさか、そんなことは…でもその光

景は消えない。

ふと電光掲示板を見た。背筋が凍った。残り時間が21秒で止まっていた。

私はゆっくり振り返った。

「なんで…」

「けっ。俺はこんな怪我じゃ死なねえよ。はあ…はあ…」

「本当に死ぬよ？」

「今言ったら、こんな怪我じゃ死なねえって。それより、よくもロ―プグルグル巻きにしてくれたな」

あり得ない。あの怪我で…歩くだけで激痛が体全体を蝕む状況で…でも――

「部屋にあったモニターを見てビビったぜ。俺の名前とあんたの名前が表示されててよ」

――嬉しい。何故かはわからないけど、こんなにハラハラするなんて…楽しい！

「ゆっとくけど手加減はしないよ？」

「もちろんだ！」

ここで放送が掛かった。

「何故かはわからないがボロボロ状態の歩上 大空登場ッ！！そしていよいよ今、始まるうとしています！

レベルストーナメント第一回戦！！」

こんなにワクワクする戦いは初めて…最初から本気で行かせてもら

うよ！

「歩上 VS 風桐。スタートッ！！」

こうして私と歩上君との戦いの火蓋が切って落とされた。

No. 12 レベルストーナメント開始 歩上VS風桐（後書き）

いよいよ始まりましたねレベルストーナメント！

一体スカイは大丈夫なのでしょうか？

そして風桐の能力は？

No. 13 決着 ただ傍にいたいから

正直なところ：マジでキツい。

少し体を動かしただけで全身に激痛が走る：

でも、風桐先輩にプライドがあるように、俺にだってプライドはある。それにこのトーナメント、絶対に勝たねえとダメなんだ：

「い、行くぞおおおおッ！！」

「おいで、返り討ちにしてあげるよッ！！」

フラッシュユースト
光速移動で懷に：一瞬でけりをつける！

「ッ！？」

入った！懷に。一気に畳み掛ける！

「おらああああ：ああ！？」

「もうちょつとだったね、少し焦らされたけど」

俺は先輩を斬ったつもりだった。完全に。今の攻撃、ESEを100は削れていいはずの攻撃だった。

：何故無傷なんだ！

そして、俺は何かによって吹き飛ばされた。そのせいで俺の攻撃は外れたわけだ。

俺は地に足をついたまま飛ばされた勢いを消せずにスライドする。勢いが止まると、俺は再び光速移動で懷に入る：予定だった。

「な、何だ！？」

先輩が俺に手を翳したと思ったら、見えない斬撃が俺を襲った。

「ぐう…く、クッソおお…がああああッ！！」

俺は刀を振るい、光の斬撃を放った。

「攻撃は早いけど、モーションが遅いから、見え見えだよ。ほら！」
「くッ」

再び斬撃が俺を襲う。くそ、見る見るうちにESEが削られていく。
とりあえずこの状況を打開しないと…

「あれ？また消えた？」

くそ、怪我のせいで光速移動も長くは続かない…か。
しかし、1つ…わかったぞ。

「あれ？そんなところにいたんだ」

「…風」

「？」

「あんた、風使いだろ？さっきの攻撃は風の斬撃…『かまいたち』
と言ったところか」

「…」

「俺の光速移動に反応出来たのは、あんたの周りには風の結界みた
いなもんを作って、

結果内に入れば居場所を特定される…

そして、居場所が判明すればそこに風を放ち、距離を取って自分は
遠距離から攻撃…」

「…よくわかったね。たったこれだけの接触で全て読まれるとは思
わなかったよ———けど」

「？」

「わかったと言って状況は変わらない！」

そうなんだよな…それにさっきの攻撃で痛みが増した。光速移動も連発は出来そうにない。

さあて、どうやって打開する、この最悪の状況を。

体が痛くて攻撃のモーションが遅くなり、すぐに読まれる。

光速移動は連発出来ねえ。

近づこうにも跳ね返される。

こんだけ不利な条件が揃って、有利な条件は一つもない。なら――

「また消えたね、どこから出てくる？」

――ゴリ押ししかねえ!!

まず背後に周り、斬撃を放つ。

「…後ろ」

痛つつう、今にも腹が爆発しそうなくらい痛え。だが我慢だ。
つ…次は正面！

「…正面」

ダメだ。全部ギリギリのところでは避けられる。
こ…こうなりや、もっと…近くで！

「…!?! 真後ろ」

当たれッ!!

「ぐはっ」

も…もう少しだったのに…このヤロウ…!

「こ、この距離で!？」

く、それでも紙一重で避けたか——でもまあ

「——こっちは食らってもらうぜ？」

「いつの間に!？ キャアアア——」

やっと一発…か。これで先輩と俺のESEはほぼ同じ。

でも、俺の圧倒的不利な状況は変わらない…

このチャンスで一気に攻める!

体の痛み? 気にしたら俺の負けだ。

流石に痛いけどな…今にも血反吐が出そうだ。

「らあああああ!」

「させないよ!」

ま、また飛ばされた。それに次いで風の斬撃が俺を切り刻みやがる。一旦回避だ。

「はあ…はあ…うぐっ…つくはあ…」

「体の方…そろそろ限界みたいだね? 無理はダメだよ？」

「…はあ…う、うるせえよ」

で、でも何故だ? 何故あの至近距離からの攻撃は当たった?

先輩は風で常に俺の居場所を感知していたはず。

それに先輩のあの言葉…『いつの間に』ってのが引っ掛かる。俺の

場所が分からなかったのか？

——まさか！？

「…試して…見るか？」

「ん？何か言った？」

まずは距離を詰める。”光速移動を使わずに”。

「瞬間移動は使わないの？」

「使ってほしいのか？」

「そんなことは…ないけどッ！！」

も、問題はこの『かまいたち』だ。これが地味に効く。
斬撃で一気に蹴散らす！

「おらあああ！」

「当たらないよ！…あれ、刀は？」

よし、入っている！”盲目の結界内”に！

「まあいいや、悪いけど吹き飛んで——」

「そんなことしてていいのか？上見てみ？」

「え？…キャッ！」

上から降ってきたのはライトブレード、事前に投げておいたのさ、
”結界内”に入ると同時に。

しかも今先輩が避けて、地面に刺さったライトブレードにはある細
工がしてあるのさ。

「…な、何！？キャアアアア」

先輩の足元から光の針が出て、先輩を襲う。

俺のとおっておき、ライトクエイクだ。

距離を詰める！開けたら俺の負けだ！

この結界：仕組みがわかったぞ。

…な！？

「う、浮いた！？」

「いやまさか、怪我人にここまでE S Eを削られるとは思わなくてね。本気で行くよ」

「結界から出ちゃったか…」

「気付いたみたいだね、結界の仕組み」

「…あの風の結界は中身が無い：所謂空洞式。一度は入れば中で居場所を特定されることはない

つまり入った瞬間の居場所しか特定できない。

俺は光の速度で移動していたから、その仕組みに気付かなかった。

歩いて結界に入ったら微かだけど風を感じた。そういうことだろ？」

「…私のトリックの全部に気付いたのは歩上君が初めてだよ。それでも…私には勝てない！！」

「ぐあああああ」

空から風の斬撃が…さっきとは比べ物にならない量だ。

み、身動きできない…半端ないスピードでE S Eが減って行く。

このままじゃ…負ける。

動け…俺の体…動いてくれ…

「ウオオオオオオオラアアアッ！！」

渾身の一撃。これが俺の放つ最後の斬撃だ！！

「この攻撃は当たらないよ！」

「それはフェイクだ！」

「え！？」

俺の目の前には先輩が、先輩の目の前には俺が。先輩から考えてみたら、どうやって結界内に入ったかが分からないでいるのだろう。……これで終わりだ！

「終わりだ ああッ！！！」

「私だって：負けられないのよおおッ！！」

俺と先輩の一撃はほぼ同時だった。

先輩は風を纏わせた拳を俺の腹に叩き込んだ。

俺は斬撃の力を刀に憑依させたまま先輩を斬り上げた。

「がッ」

俺は勢いよく地面に叩きつけられた。

空を見上げると空からは先輩が。エフェクティッド能力発動変化が解けているため風が使えないでいるのだろう。

それは同時に俺の勝利を告げるものとなった。

あのままじゃ先輩：やばいかもな。

地面に叩きつけられて：即死？

なんてことはないだろうけどまあ――

「きゃああああッ！ってあれ？痛くない」

「――怪我されても困るからなあ。怪我人が言うのもどうかと思うが」

「歩上君！？：そっかあ、私負けたんだ」

「みたいです。かなり接戦でしたけど」

そうやって俺は先輩に自分のESE残量を見せた。

「3!？そんなあ、じゃああと一回斬撃を与えてたら勝ってたの？」

「…そゆコトですね」

「はあ…まさか怪我人に負けるなんてなあ」

「そんなこともありますよ。人には各々の得手・不得手があります」

「…ふふ、ありがと」

ん？気のせいかもしれないが先輩の笑った顔、今まで見た顔と少し変わった気がする。

「それより…この態勢…結構恥ずかしいんだけど」

今の状況…先輩が空から降ってきたため俺は先輩をキャッチ。

俺は先輩を抱えている。所謂『お姫様だっこ』というやつか？

「あ、すいません」

俺は先輩を降ろした。

「いや、いいよ。嫌な気分じゃなかったし」

「…?——」

あれ？何か…意識が…遠退いて…行く…

「——みうえ君?——っかり——て!——あ——み上——ん——」

俺は先輩の言葉を最後に意識を失った。

「???? side」

「歩上 大空。生きていたか。そして恐らく歩上 大空を匿っていたのは風桐 春風。」

雑魚が邪魔しやがって。まあいい2人とも何れは殺^やる予定だからな、精々仲良しごっこを楽しんでおけ」

その男はモニター室を出てある場所に向かった。

「side out」

トーナメント第2回戦。

3年 針城 VS 6年 大海

「歩上も気に入わねけが、お前もきにくわねえんだよ!」

「:どうしても歩上に怪我を負わせたのは:お前だな?」

「何のことだ?」

「そんなことをしないと勝てないのか? レベルS:こんなやつと一緒にして欲しくないものだな」

「あまり調子に乗るなよ?」

「本当の事を言っただけだ。それを調子に乗っていると判断しているお前に問題がある」

「ふざけやがって!!」

トーナメント第2回戦 スタート。

「…ここは…どこだ？」

見慣れない天井。窓からは夕焼けの日差しが差し込み、その窓の傍に一人の生徒がいた。

「…先…輩？うぐっ」

戦ってた時より痛みが増してる。無理し過ぎたか…

「…あ、寝てた。歩上君、起きてたんだ」

「今起きました。えっと…何故ここに？」

「…覚えてない？1回戦が終わってすぐ歩上君倒れたんだよ？やっぱり無理しす——」

「いや、俺じゃなくて…先輩」

やっぱり？みたいな顔されても…ってか分かってたんなら最初から答えて下さいよ。

「…聞きたい？」

「いや、どっちでも…」

「じゃあ話す。私がここににいる理由。正直、私にもわからない」
「え？」

それは…どういう事なんでしょうか？
俺にもわからないです…

「でも——」

「？」

その言葉の意味：俺にはいまいち分からなかった。

好奇心・対戦相手、他にもいろいろと考えた。でもしっくりこない。
これは本人に意味を訊いてもいい事なのかすらわからなかった。

「――きみの傍にいたいって思っちゃって」

No. 13 決着 ただ傍にいたいから（後書き）

今回でスカイVS風桐戦終了です。

如何でしたか？戦闘風景書くの難しいですね（汗

そしてフラグ立ちました！風桐ルート！（笑

正直なところヒロイン決めてないんですよね：

まあ後に決めるとしましょう！

評価・感想の方よろしくお願いします。

No. 14 夕暮れの一時 (前書き)

今回はスカイ&春風回です
なんかいいムードですが果たして…(笑
では、どうぞ！

No. 14 夕暮れの一時

「俺の…傍に？」

部屋に静寂が続く。こういう場合、俺はどうすればいいんだ？

「ふふふ」

「え？何かおかしかったですか？」

「私のせいで歩上君を困らせちゃったみたいね」

「いや、そんな事は。…ただ」

「ただ？」

「その言葉にはどんな意味が込められてるのかって思いまして…」

俺は別に困っていたわけじゃない。ただ先輩の真意が気になっただけ。

それは訊いていものなのかどうか迷っていたのを、先輩が『困らせた』と勘違いしたのかもしれない。
結局のところ訊いてしまったがな…

「…歩上君はどう思う？」

「え？」

「さっきも言ったけど私にもあまり分かんないの」

「はあ…」

「そこで！歩上君はどう受け取った？私の言葉」

いや、俺はって言われても…そのことで悩んでたんですけど…

「こ、好奇心…とか？」

「んゝそれもちよつとあるかなあ。でも何か違う」

分かるかぁ！かすめただけで奇跡だぞ！

「…わかんないです。況してや俺なんか…」

「え？それってどういう――」

し、しまった！！（『つ』は誤字じゃないぞ？）
つい言ってしまったッ！！

「いや、何でもないです」

「…そっか」

ふー、なんとかピンチを回避できた…のか？
それ以上、先輩は何も訊いてこなかった。

「先生が、歩上君は少なくとも2ヶ月はここで様子見だって。相部屋の人にも連絡済みだそうよ？」

「2ヶ月…ですか」

こりゃ、また体鈍っちゃうな…それに暇になるな。

おまけに体中痛えし、良い事なしだな…

「気を落とさないで。私で良ければ放課後なら毎日来れるから」

「え？」

「私、部活入ってないし、放課後は暇だから」

先輩は何故、俺に拘る？普通そこまでするか？対戦相手とはいえ。学年も違えば性別すら違うのに…

「あ、ありがとうございます」

「もしかして…迷惑？」

「いや！そんなことはないです！絶対に」

「ふふふ、そう言ってもらえると嬉しいよ」

ん？もう日は落ちたよな？

先輩の頬が赤みを帯びているように見えるのは気のせいかな？

「せ、先輩はどうして…そこまで——」

「ねえ？今更かもしれないけど『先輩』とか『歩上君』とかやめな
い？」

「…？」

「私たちはもう他人じゃないんだから」

は、果たしてそうなのか？

「まあ俺はどっちでもいいですよ？」

「じゃあ私は君の事を空、空は私の事を春風って呼ぶこと。いい？」

「そ、空？」

「うん。だってスカイは大空って書くんでしょ？『大空』の『空』
を取って空。だめ？」

「…今までそんな呼ばれ方されなかったから…俺は別に構わないで
すよ？」

空…か。まるで自分の事じゃないみたいだ。

ってか俺、自分で言うのもなんだが、最近先輩との交流が多くね？

「良かった。えへへ」

「ッ／／／／」

う、つい顔を背けてしまった。

先輩の笑顔…初めて見た気がする。
どうしちゃった俺。
な、何なんだ…何か変だぞ？

「ん？どうかした？」

「いや、何も…」

「…そういえば、さっき何か言ってなかったっけ？」

「え？…ああ…気にしないでください」

何で隠すんだ？何で訊かないんだ？

自分の中で自分自身に訊いたが、答えは見つからなかった。
ただ、なんとなく…訊かなかったってだけの話だ。

「…空は隠し事が多いね」

「すいません、気が変ったって言うか何というか…」

「まあいいんだけどね」

それから俺は春風先輩と1～2時間程話した。
先輩との話は全くとっていいほど退屈しない。
時間のことなんてすっかり忘れていた。
時刻は8時を指していた。

「もうこんな時間かあ。私はそろそろ帰るわね」

「そ、そうですか？」

「うん。まあそんな悲しい顔しないで」

「俺、悲しい顔してました？」

「そんなオーラを感じた」

この人…出来る！！

「じゃあね、空」

「はい」

そう言って先輩は部屋を出て行った。

なんだろう、先輩と話していると…緊張する。何でだろう。

先輩がいると変に意識してしまう…何だこのモヤモヤは。

…ああもう！今日は寝る。

No. 14 夕暮れの時 (後書き)

如何でしたか？

入院2ヶ月は長過ぎると思いますよね。

私も思います (汗)

しかし、流れは既に考えてあるので問題御無用。
では評価・感想の方よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4147s/>

エフェクト学園恋目録

2011年11月17日19時26分発行